

新制國語讀本

卷七

375.9
Da19
資料室

41657

教科書文庫

4
810
41-1938
200030
1827

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

2 1 20 9 8 7 6 5 4 3 2 1 10 6 8 8 7 6 9 5 4 3 2 1 0

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

昭和三十一年一月十一日

文部省檢定濟

中學國語教科用書・實業學校國語科用書

新制國語讀本

文學博士 佐佐木信綱 編
文學博士 武田祐吉

湯川弘文社

3959
S219

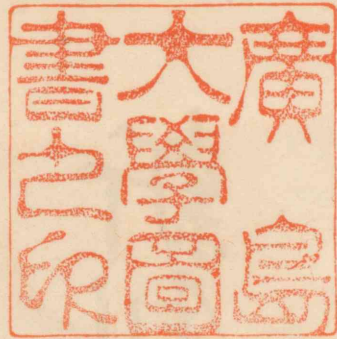
新制國語讀本

湯川弘文社



楠木正成銅像

英風



新制國語讀本 卷七

目次

- 一 國體の明光
- 二 臣節
- 三 頼山陽
- 四 雅文三趣
- 一 隅田川の雨
- 二 芳宜園大人を祭る

村上參次	編者	橋千蔭	村田春海
一	三	元	三
	八		

目次

三	貧報の冠者	石川雅望	三五
五	光頼卿参内	〔平治物語〕	二六
六	おらが春	小林一茶	二七
一	おらが春		二七
二	雀の子		二七
七	物ぐさ太郎	〔御伽草子〕	二八
八	處世の道	夏目漱石	二九
九	朱戀の葉蔭	佐佐木信綱	三〇
一〇	草山の月	〔和歌〕	三一
一一	熊野落	〔太平記〕	三二

二	閣上の戦	瀧澤馬琴	三三
三	科擧者とあたま	寺田寅彦	三三
四	象山と松陰	徳富蘇峰	三三
五	海外發展の要諦	後藤新平	三三
六	長柄堤の訣別	坪内逍遙	三三
七	道義の氣魄	平泉澄	三三
八	萬里長城の歌(抄)	土井晩翠	三三
九	音の世界	栗原嘉名芽	三三
二〇	人間ゲーテ	茅野蕭々	三三
二一	日本國民性の長短	田澤義鋪	三三

二三 菊花の約	上田秋成	二三
二三 茶の味	奥田正造	二四
[補習文]		
一八 一倫の敦塔	夏目漱石	一五
一廿 二鐘の音	西條八十	一六
附録		
一五 宮殿・裝束・乘輿圖		
一四 山と海		
一三 櫻と梅		
一二 土と石		



三上參次

文學博士。國史學者。東京帝國大學名譽教授。帝國學士院會員。兵庫縣の人。慶應元年生。

ニッセキ
キヨウホ

新制國語讀本 卷七

一 國體の明光

三上參次

我が國民精神は、皇室を本源として涵養せられ、また發育し來つたものである。歴代の天皇は、慈雨の如き御仁徳を國民の上に垂れたまひ、國民は日夕これを仰慕し奉つて今日に至つてゐるのである。かの所謂亂世に在つて、畏くも皇室の最も御不如意でいらせられた御時にも、天皇には、常に蒼生の身に御心をよせ給ひ、或は惡疫の流行につけ、或は飢饉につけ、深く宸襟を惱まさせられ、朕は民の父母として徳蔽ふこと能はずと仰せられ、更に、世の不祥も、朕

後奈良天皇
第百五代。

ソツト

の不徳のためと宣ひ、御不如意なる中にも、及ばせ給ふ限りの事をなし給ひし後奈良天皇の御事蹟の如き、誰か至高至大なる御聖徳に感泣せぬであらうか。
まことに、代々の天皇は徳を樹て給ふこと深く、君恩は率土の兆民に及び、國民は愈々忠誠の眞心を捧げ、茲に萬邦無比の國體を生み出すに至つたのである。我が國の皇室と國民との關係は、他國のそれの如く、權力的、人爲的、また法律的のものではなくて、全く自然的に發生したところの親子關係にあるのである。國民相互の間も、家族的なる情愛に依つて結合せられるに至つたものである。まことに我が國は、人情の自然に基づいて成つた國家であつて、權力や威力や法律を以て作爲せられた國家社會とは、その成立の歴史を異にしてゐるのである。自然には矛盾が存在しない。自然は永遠の原則の上に立つところのものである。人情の自然に出

發せる我が國體の永遠に持續せらるべき理由も、こゝに存在するのである。

宋 (西曆九六〇—一二七九) 但し、一二七九年以後は南宋。
元 (一二七一一—一三六八) 一三六八—一六四四年に明朝莊烈帝滅び、一六六二年に明の桂王永曆が滅びた。
明 (一三六八—一六四四)
清 (一六一六—一九一〇)

今、試みに是を隣邦支那に比較して見よう。例へば、宋が滅びて元となり、元が滅びて明となり、明が滅びて清となる。是等の場合には、新なる朝廷に盡す者は、前朝の君主に對する反抗的態度となり、前代の朝廷に忠義なるものは、新なる君主に對する反抗的態度を採ると云ふが如き矛盾が生じて來る。それは革命易姓を常とする國に在つては當然の事である。然るに、我が國には、かゝる事柄は絶対に發生せぬのである。我が國にも臣下の間に政權の移動のあつた場合、例へば源平の際などには、是に似た事が無いでもないが、それは國體には全く關係の無い事である。翻つて考へてみると、如何なる國家であつても、その存立してゐる間は、國運の永久不滅ならむことを願はないものはない。併し

秦の始皇 （いっしやうりん）
 支那夏・殷・周
 三代の後をうけ
 て、嬴政が天下
 を統一して秦の
 始皇と稱した。
 六國 （りくこく）
 支那春秋戰國時
 代の齊・楚・燕・
 韓・魏・趙の六
 國。
 隋の文帝 （すい）
 楊堅。隋朝第一
 代の帝。在位五
 八一—六〇四。
 隋は三世三十七
 年にして滅び
 た。
 義は乃ち君臣云
 云 （ぎはのちきんぐん）
 隋書に「義乃君
 臣情兼父子」と
 ある。
 恭帝 （きんてい）
 恭帝は、恭帝
 侗をさす。（在
 位六一—六一
 九）

事實はその通りに行かぬものが多い。かの羅馬の盛んなる時代
 に在つては、その國民は等しく羅馬の無窮不易を信じたものであ
 った。けれども、久しからずして北方民族のために蹂躪せられ、亡
 國の悲しみを見た。秦の始皇は六國を滅し、支那全土を統一して
 自ら始皇帝と號し、二世三世より數へて千萬世に至り、以て帝位を
 無窮に傳へようとした。けれども僅かに三世にして滅びた。隋
 の文帝も、その遺詔に「義は乃ち君臣情は父子を兼ね」といつてをる
 けれども、是も其の曾孫の恭帝の時に亡びた。近頃の露獨、埃等の
 諸國皆然らざるはない。然るに、我が國に在つては、天照大神の神
 勅の精神が萬古に互つて存し、時代により多少盛衰の差はあつて
 も、常に其の明光を放ちつゝあるといふ事柄こそ、眞に我が國家の
 他の國家と相違のある根本點である。私達國民は、よく此の根本
 的特色を心肝に銘し、我が國體を益、光輝あるものにするやう不斷

神勅

日本書紀に「豐
 葦原千五百秋之
 瑞穗國是吾子孫
 可レ王之地、宜爾
 皇孫就而治焉。
 行矣。寶祚之
 隆、當下與二天壤
 無窮者矣。」
 會澤正志齋
 常陸(茨城縣)水
 戸藩の儒員。文
 久三年歿。年八
 十二(二四四二
 一—二五二二)
 藤田東湖
 水戸藩士。勤王
 家。安政二年歿。
 年五十。(二四六
 六—二五一一)

ケヨウユク

に努力せねばならぬのである。
 水戸の碩學、會澤正志齋は、此の邊の事實を説明して「帝王の持み
 て以て四海を保ち、久安長治にして天下動搖せざるものは萬民を
 畏服せしめ、一世を把持する謂にあらずして、億兆一心、皆其の上を
 親しんで離るゝに忍びざるの實、誠に恃むべきなり」と云ひ、藤田東
 湖は「上の人は生を好み民を愛するを以て徳とし、下の人は一意上
 に奉ずるを以て心とす」と説いてゐるが、いづれも歴代の聖徳と臣
 民の忠誠とを語を換へて述べてをるのである。君民が一心同體
 であるところに、眞に我が國體の永久無限なる所以を見出し得る
 のである。
 我が國體の優秀にして、世界萬邦に異彩を放ちつゝあることは、
 歴史の證明する所である。繰返していへば、我が國體は肇國以來、
 連綿たる萬世一系の皇統昭乎として君臨せられ、列聖何れも徳高

く、君とし親として臣民を愛撫し給ひ、臣民は正心誠意奉公の至情を捧げて忠孝の大道を盡し、君民一致協力して永久に其の美風を維持せむとしつゝあるのである。是れ全く世界の他の諸國に見出し能はぬところであつて、金甌無缺の國體と申すより外ないのである。天照大神の神勅の如く、天壤とともに窮りない皇國の盛運は、これ世界萬國に比類なきところであつて、しかも、世界の他國民に誇り得る唯一のものであるとなすことも、決して不當ではない。政治の事、社會の事、萬般の事、皆之を中心とし之を根幹として、進めらるべきである。

教育勅語に、

「我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ」と仰せられ、皇祖皇宗は、我が國家が永遠に興隆するやうに宏大なる規模を以て之を肇造し、深厚なる恩德を國民に施したまひしこ

とを示され、且、

「我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ是レ我カ國體ノ精華ニシテ」

と仰せらる。億兆の臣民が心を一にして忠孝の美德を勵み、君民その德を以て一體となれることを以て、我が國體の精華と宣うたのである。我等國民たるものは、この我が國體の優美なる所以を自覺すると共に、其の光榮ある國史をして、更にうるはしきものとして將來に永久に發展せしめねばならぬのである。而して、是れ實に、生を此の國に稟けたる者の當に負ふべき責任である。日本國民としての最大なる光榮であると同時に、最高なる義務である。

（日本國體論）

北畠親房

吉野朝の忠臣。正平九年歿。(一五九二—二〇一四)

二 臣 節

北 畠 親 房

わろろ

鳥羽院 鳥羽天皇 第七十四代。保安四年(七八三)御讓位。制符 セシシ

およそ王土に生れて、忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ず、これを身の高名と思ふべきにあらず。然れども、後の人を勵まし、その跡を憐みて賞せらるゝは、君の御政なり。下として競ひ争ひ申すべきにはあらぬに、まじりてまじりて、させる功なくして過分の望をいたすこと、自ら危むるはしなれど、前車前車の轍を見ることは、まことに有りがたき習なりけむかし。中古までは、人のさのみ豪強なるをば誠められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失ふためしあれば、誠めらるゝも理なり。
鳥羽院の御代にや、あらん諸國の武士の、源平の家に屬することを停むべし。といふ制符、度々ありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は、宣旨宣旨を賜はりて、諸國の兵を召具しけるに、近代とな

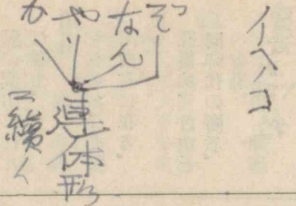
りて、スソツマ肩を入るゝやから多くなりしによりて、この制符は下されき。ばたして、今までの亂世の基なれば、いひがひなきことになりけり。

大日本神代卷 天祖始基 神水統傳
倫我國此事 異類 其類 其類 其類 其類
天神代 豊事 京十五 秋 徳徳 徳徳 徳徳
初聞 天祖 天祖 天祖 天祖 天祖 天祖
予也 知天 天祖 天祖 天祖 天祖 天祖
生倫 八嶋 依 依 依 依 依 依

神皇正統記 寫本

この頃の諺には、一度軍に吹陣吹陣し、或は家子、郎從、節に死ぬるたぐひあれば、わが功におきては、日本國を賜へ。若しは半國を賜はりても足るべからず。など、そ申すめる。

言語は云々 易經に「言行者君子之樞機」とあるによる。 堅き氷云々 易經に「履霜 堅冰至」とあるによる。



ことに、さまで思ふ事はあらじなれど、やがて、これより亂るゝは、おんちろうおんちろうともなり、また朝威の輕々し、おんちろうおんちろうも、推量らるゝものなり。言語は君子の樞機なり。といへり。あからさまにもあからさまにも、君をないがしろにし、人に驕ることあるべからぬことにこそ。堅き氷は霜を履むより

許由
キヨイウ。古、支那の箕山に住んだ隠士。

穎川
エイセン。支那河南省に在る。巢父、許由と同時代の隠者。

李賀
李賀の傳

塞がりなむ

至る習なれば亂臣賊子といふ者は、その初め、心言葉を慎まざるより出で来るなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改まるにもあらず。人の心の悪しくなりゆくを末世とはいへるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へむとありしを聞きて、穎川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、この水をだにきたながりて渡らず。その人の五臟六腑の變れるにはあらじ。よく思ひならはせる故にこそあらめ。一休
なほ行末の人の心思ひやるこそあさましけれ。おほかた、己一身は恩に誇るとも、萬人の怨を残すべきことをばなどか顧みざらむ。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて、限りなき人に分たせ給はむことは推してもはかり奉るべし。若し一國づつ望まば、六十六人にて皆塞がりなむ。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬の人は悦

知らせ給ふ

將門
平將門。

蕭何
高祖の臣で關中の庶政にあつた人。

張良
字は子房。高祖の參謀。

韓信
高祖の臣で大將として天下を定めた人。

謀を云々
漢書高祖紀に、「運籌帷幄之中、決勝千里之外、吾不如子房」とあるに

留
今の河南省開封府陳留縣

文治
後鳥羽天皇の御代の年號。八四九一―八四九

ばじ。沉んや、日本の半を心ざし、みなながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心のきざして、言葉にも出で、面に恥づる色のなきを、謀叛の初めといふべきなり。昔の將門は、比叡山に登りて、大内を遠見して謀叛を思ひ企てけるも、かゝる類にや侍りけむ。昔は、人の正しくて、おのづから將門に見も懲り、聞きも懲り侍りけむ。今は、人々の心かくのみなりにたれば、この世はよく衰へたるにや。漢の高祖の天下を取りしは、蕭何、張良、韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも、張良は高祖の師として、謀を帷幄の中に廻らして、勝つ事を千里の外に決するは、この人なり。と宣ひしかと、張良は驕ることなくして、留といひて少しきなる處を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかと、張良は身を全くしたりき。近き世の事ぞかし。頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討せしに、自ら

平重忠
長岡の郡

宮城縣遠田郡の
一部。

直實
熊谷直實。

下文

こゝでは鎌倉幕府の政所から所領を宛て行ふ時などに與へた文書をいふ。

神皇正統記
六卷、建國の始
めから後村上天
皇の御事蹟まで
を記した書。北
畠親房の著。

向ふことありしに、平重忠が先陣にて、その功勝れたりければ、五十
四郡の中、いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたる少
しき處を望み、賜はりけりとぞ。これは、人に廣く賞をも行はしめ
むが爲にや。賢かりけるをのこに、また直實といひけるも
のに、一處を與へ給ふ下文に、日本第一の剛の者なり」と書き、賜ひ
けり。一とせ、かの下文をもちて奏聞する人のありけるに、褒美
の詞の甚しきに、與へたる處の少き、誠に名を重くして利を軽くし
けり。いみじきこと」と、口々にほめあへりけり。いかに心得てほ
めけむと、いとをかし。
これまでの心こそなからめ、事に觸れて君をおとし奉り、身を高
くする輩のみ多くなれり。ありし世の東國の風儀も變りはてぬ。
公家の古き姿もなし。いかになりぬる世にかと歎き侍る輩もあ
りと聞ゆ。
(神皇正統記)

梅野栗山
春水

春水
名は惟寛、儒者
文化十三年歿。
年七十一。(二
四〇六一二四七
六)

柴野栗山
名は邦彦、又は
彦輔。江戸幕府
の儒官。文化四
年歿。年七十四。
(二二九四一
四六七)

三 賴 山 陽

編

者



賴山陽は、名を襄字を子成といひ、通稱を久太郎と云つた。山陽
又は山陽外史といふのは其の號である。天性峻峭にして、自ら持
するに氣節を以てして、未だ己を屈
して人に隨ふといふことをしな
か
頼
つた。父春水は、山陽の二歳の時、藝
州藩學問所の儒員となつたので、彼
も其の地に於て成人した。
彼は年少の頃から文才に長け、十
三歳の時、一詩を當時江戸に在つた
三歳の時、一詩を當時江戸に在つた
春水に寄せて、柴野栗山に歎賞されたと云はれてゐる。次の詩が
即ちそれである。

杏坪

名は惟柔、春水の弟。儒者。政治家。天保五年(二四一六)死。年七十九。(二四一六—二四九四)

尾藤二洲

名は孝廉。江戸幕府の儒官。文化十年(二四〇五)死。年六十九。(二四〇五—二四七三)

大祥忌

三年忌をいふ。

錦囊を肥す

人口に膾炙す

十有三春秋。逝者已如水。天地無始終。人生有生死。安得類古人。千載列青史。後、叔父杏坪翁に従つて江戸に遊び、尾藤二洲の塾に學ぶこと一年にして、復藝州に歸つた。その頃から彼の才學は愈々進んだ。文化八年の頃から、京師に寓居して日夜刻苦勉勵した。文化十三年父危篤の報に接し、急遽歸郷したが、遂にその臨終に際會することが出来なかつた。文政元年二月、その大祥忌に當つて再び廣島に歸展した。喪を終へるや九州各地を歴遊し、錦囊を肥して翌年の春、廣島に立歸つた。此の行脚によつて得た詩文には、朗々として誦すべく、古今の絶唱として人口に膾炙してゐるものが多い。山陽は九州の旅より歸るや、直ちに母を奉じて、京・奈良・吉野等に侍遊して、孝養の限りを盡した。「送母路上短歌」と題する詩の一節

に、次の如きものがある。

五十兒有七十母。此福人間得應難。

南去北來人如織。誰人如我兒母歡。

此の詩を誦するものは、誰しも彼の孝心の篤きに動かされるであらう。

雲耶山耶吳耶越。水天髣髴青一髮。萬里泊舟天草洋。煙橫蓬宮。漸沒瞥見。大魚波間跳。白當船明似。月。

山陽 筆

筆 陽 山 頼

山紫水明處
山陽の詩に、この語がある。

文政六年には、京の三本木に家を買つて水西莊と稱した。梅竹を庭中に雜植し、さやかな草堂を、賀茂川に臨み東山に對する位置に設けた。是が所謂山紫水明處である。天保元年に胸痛を病

日本政記
十六卷。神武天皇の御代から後陽成天皇の御代に至る間の編年史。

日本外史

二十二卷。源平二氏の興起から徳川氏の初期に至る武家の歴史。

保元物語

三卷。保元の亂を中心とする軍記物語。作者未詳。

んだが、死を怖れず、日本政記の稿を手にして絶えず刪潤を續けてゐた。然るに天保三年、病革まり、九月二十三日、眼鏡を掛けたまま、瞑目したのであつた。

山陽の著書には、日本外史・日本政記・通議詩文集等があるが、就中、日本外史が最もよく世に聞えてゐる。

元來、文章はその作者の氣象のあらはるゝところであり、人格の反映するところである。山陽の文章を見ると、到るところに才氣潑刺たる彼の眞面目が躍如としてゐる。保元物語に、

まして清盛などがへろへろ、矢、何程の事か候ふべき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散して捨てなむ。

とあるが、是を日本外史中に漢譯して、次の如く敘述してゐる。

至如平清盛輩、臣鎧袖一觸、皆自倒耳。

また、平重盛が、その父清盛の事を發せんとするを聞いて、皇恩の大

漢語(五)

古ん
願望
未定
傳

なる所以を説き、その早計なるを懇々として諫言する一條が、平家物語の中に出てゐる。その一節に、

悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さむとすれば、迷盧八萬の巔よりもなほ高き父の恩忽ちに忘れむとす。

しきかな、不幸の罪を遁れむとすれば、君の御爲には既に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これきはまれり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、たゞ重盛が首を召され候へ。

忠孝兩全たり難き重盛の胸中を述べた名文である。これと並び稱せられ、且同一事に取材した文章が、日本外史に出てゐる。

欲忠則不孝。欲孝則不忠。重盛進退窮於此矣。生觀是感不若死也。大人必欲遂今日之舉、先刎重盛、首然後發。

此の簡勁なる一節は、蓋し日本外史全篇中の有数の文字であらう。

國文と漢文との相違こそあれ、僅か數行足らずの文章の中にも、彼の雄闊なる魄力が横溢してゐるではないか。且又彼の草する漢文が、如何に力強く日本化されてゐるかを窺ふことが出來よう。彼は一種の和習とも稱すべき語句を好んで用ひ、力めて日本の漢文を作ることに留意した。公卿の柔弱なるものを指しては「長袖者」と呼び、猪武者たる俗言を漢譯するに當つては「野猪ニシテ而介者」といふが如き語を以てしたのでも首肯される。

彼は平常左右の人々に、自分を才子と謂ふものは、まだ自分を知らない人である。自分をよく刻苦すと謂ふものは、眞に自分を知つてゐる人である。」と語つたと傳へられてゐる。彼が詩を作つては國民詩人となり、史を著してはよく時代の精神を發揚し得た所以のものは、畢竟彼の愛國の至誠と、不斷の勉學研鑽とによることを忘れてはならないのである。

橋千蔭
加藤氏。國學者。
歌人。文化五年
歿。年七十四。(二
三九五—二四
六八)
石濱
隅田川の西岸淺
草寺の北にある
地名。

四 雅文三趣

一 隅田川の雨

橋千蔭

葉月二十日あまり、秋のけはひの懐かしくて、例の隅田川のほとり、石濱の庵に行きて宿りぬ。

有明の月のにほひも、霧立ち渡る曉のさまも、所がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼ降る日なむ殊にあはれは深かりける。もとより萱葺ける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろ／＼と散るもあはれなり。水の面は動くともなくて、鏡の如くなるに、雲の濃き薄きうつろひて、かつ浮びかつ消ゆるみなわにこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みをの一筋は、さしひく汐にもまじらで、とはにはなだの色に流れいにて、沖に出づめり。これや水上の秩父の山のまし水

けはひの雨

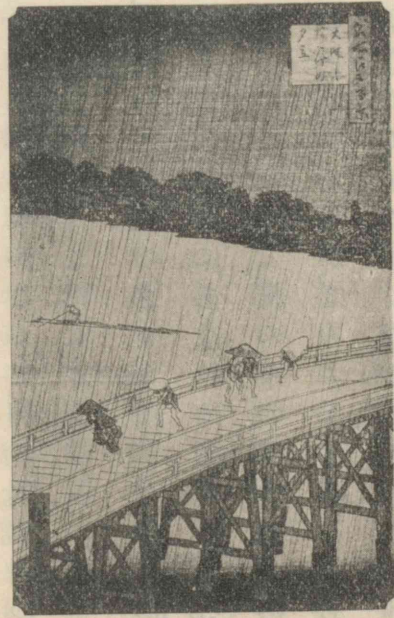
水よりまし水

は、そ
櫛の異名。穀斗
科に属する落葉
喬木。 **鹿地**

ネグウ

みさご
猛禽類の一種。
體の長さ約半
米背は褐色、腹
は白。水上を
飛んで魚を捕へ
て食ふ。此處は
他の鳥をいふの
であらう。

の落ち來るならむ。うち向ふ岸のはり原のみ、濃き墨がきの如く
なるが中に、はゝその黄ばみたるは、さすがにほのかに見えて、その
ひまひまより、長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢は、やうく
にうす墨もてかきけ
ちたらむ如く、いと①
もはるけきは、たゞ靡
かぬ煙とのみぞ見ゆ
る。此處彼處より、鴉
の飛び行きつゝ、**時**の
鷺の翼重げに起き出
でて、川の瀬の眞菰におりたて**は**、みさごの群れきて水の面に浮べ
るもをかし。上つ瀬より筏師の蓑笠著て、棹を筏の上に横たへ、己
たむだきて、思ふ事なげにてをり。筏は水のまに、く流れ行くも



筆重廣 雨の川田隅

静けし。渡守舟さし出せば、大笠かたぶけて渡り行く人の、やがて
堤をありくさまも繪によく似たり。すべてひと日のうちに、筑波
嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風通ひ來て、岸の木立も長
き堤も、あるは現れ、あるは隠れて、限りなき青海原に向ひたらむや
うに覺ゆる折もありけり。

かくて稍夕暮近くなりゆけば、群鳥のおのがじし時求むるに、雁
の、一つら二つら渡り行くなど、**え**も云はむかたなし。暮れはてて
も、猶行く水の色のみとほじろく残りて、川添小田にいはいはへるみく
まりの神の御燈の、海人の漁火ともいふべく、微かに見えわたるも
あはれなり。

秋更けてこさめそほ降る隅田川たが墨がきのすさびなる
らむ

うけらが花
五卷、橘千蔭の
歌文集。

(うけらが花)

芳宜園大人

橘千蔭

村田春海

國學者、江戸の人、文化八年歿、年六十六。(二四〇六一二四七一)

二 芳宜園大人を祭る

村田春海

こゝに文化の五年九月八日、平春海、謹みて芳宜園の大人の奥津城の御前に、菊の初花一枝を手向け、香の木一ひらをたきて、うなねつきて申さく、

あはれ悲しきかも。君は吾に十といひて一年の兄におはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君は方に盛りの齡におはして、吾はまだ童にて、**そ**侍りける。常に縣居の庭に物學びに行きかひたる時、朝に参るとしては、君の御佩の後へに従ひ、夕べに罷るとしては、君の御袖のもとに縋りて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何**か**異らむ。書讀むとしては、君を師とも尊み、**び**歌作るとしては、吾をおとしいのつらにぞ教へ給ひける。中頃にして、君は仕への道に暇なくおはし、吾は世のさがにかゝづらひて、自ら疎き方にも過ぎつるを、君仕へを退き給ひて後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を

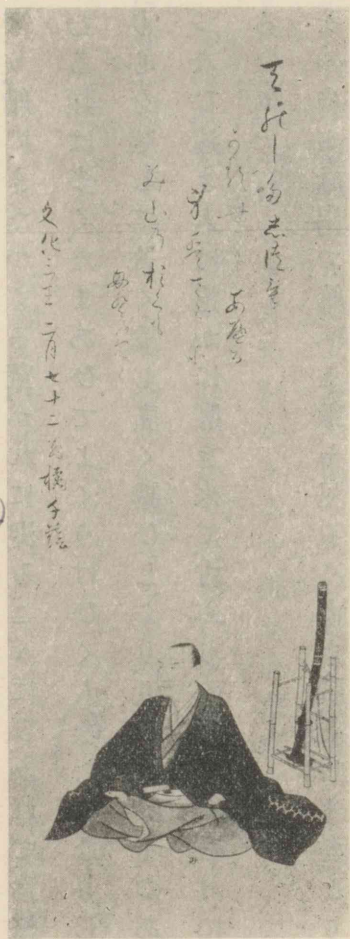
仕への道云々

千蔭が江戸町奉行大岡越前守のもとに與力であつた事をいふ。

尋ぬとては、吾道しるべをなし、月を思ふとては、君が船に相乗り、憂き事も共に憂へ、嬉しき節も共に喜びて、世にありふるわざの、まめ事もあだ事も、互に隔てなく心をかはせること、今に二十年、その初めを繰返し數ふれば、あひ友たること、既に五十年にぞ餘りける。

天のしたしつけ
かる世にあへる
身はさらにも山
のおくもともめ
し

文化三年二月
七十二翁橘千
蔭



橘 千 蔭

さるを、今後奉りて、いつの世にか相見む、何れの時にか言問はむ。常なきは人の身の習ぞと知れども、これをいかでか歎かざらむか。かるを誰**か**はよく堪へむ。

くひぜを守り
韓非子に「宋人
有耕田者。田
中有株。兔走
觸之。折頸而
死。因釋其耒
而守株。冀復
得兔。兔不可
復得。而身爲
國笑」とあるに
よる。

舟にきだつくる
呂氏春秋に「楚
人有涉江者。
其劍自舟中
墮于水。遽刻
其舟曰。是吾劍
所從墮也。舟
止。從其所刻
處。入水求之。
舟已行矣。而劍

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々下り
行けるを、賀茂の翁世に出でて、今を棄てて古に復り、青雲の高き心
しらひを求め、倭文機の文あるみやびごとを貴みいへれど、くひぜ
を守り、船にきだつくる輩、かれに泥み、こゝにひかれて、猶怪しみと
がむる類は多く、たまあひてよくうけひく人なむ稀なりしを、君ひ
とり心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人はまのあたり相
うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、古ぶりの歌、世に盛りになり
たるなり。

その自ら詠出で給へる歌を見るに、古き調、新しき姿、とりくりに
備らざるはなし。その古を寫せるは、藤原寧樂の御世に及び、後の
たくみに倣へるは、堀河、鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は口に
盡さざる事なく、目に觸るゝものは、言葉に載せざることなむあら
ざりける。これを見て、高きも短きも、めでたふとまざる人なし。

不行、求劍者、
レ此、不亦惑乎、
とあるによる。

琴後集

十五卷、村田春
海の歌文を編輯
したもの。

石川雅望

江戸の人。國學
者。狂歌師。天
保元年歿。年七
十八。(二四一三
一、二四九〇)

文章生

モンジヤウノシ
ヤウ。古式部省
の試験に合格し
たもの。

又事好みの人は、その名を君に知られては、身の面おこしと思ひて
世にも誇り、君のひと歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ
深く喜びける。

然るを、今黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わ
がどちの歎のみかは、大方の世の人の憂ひともいひつべし。これ
をいかでか惜しまざらむかゝるを誰かは慕はざらむ。

あはれ悲しきかも。わがかく言あげするを、泉の下にもさやか
に聞し召し、天翔りても遙かに看せとなむ申す。

(琴後集)

三 貧報の冠者

石川雅望

文章生行兼、身貧しかりければ、陰陽師安部のうらますが許に行
きて歎きけるは、今日となりては、僧石の儲だになし。如何にせば
此の憂ひ逃れなむと、涙ぐみていふ。此の行兼、常に文の道に誇り

五節の夜の歌舞
五節の舞の夜宴
の歌舞。

て、人ありともせず振舞ひければ、うらますもかねて悪み給ひけれど、さりげなくもてなして、とり申さむも大事に侍れど、あまりにとほしければ、告げまゐらするなり。そは皆貧報の冠者のする業なり。彼だに逐ひやり給はば、次第になりいで給ひ、よろづ御心にまかせ給ふべし。といふ。行兼、さるものやらひなむには、如何なるわざか侍る。教へ給へ。と手を擦れば、冠者は五節の夜の歌舞を悪みて侍れば、さる聲する邊には寄りも来ぬなり。家にかへり給はば、自ら行ひ給ふべし。といふ。行兼喜びて、いみじき御恩を蒙り候ひぬ。とあまたたび額づきて歸りぬ。されどじはふなる學生の筋なりければ、かの歌舞といふことを知らず、人に習ひてやう／＼に明らめける。

さて、家の内外清めまはりて、注連引渡し、よろづうるはしう構へ

白薄様云々

五節の舞の夜の
宴歌。
「白薄様、紅染
紙の紙、まきあ
げの筆、巴書い
たる筆の軸、ヤ
レコトウトウ。」

しみのすみか物
語

二卷。物語集。
石川雅望の著。

て、日暮るゝを待ちつけて、母屋の真中にありて、しはがれわなゝきたる聲を出し、伸び上りかゝまりて、家の内を舞ひ歩くことおよそ時ばかりす。さるほどに物の後、ひし／＼と鳴りて、恐ろしき鬼出で来て、白薄様、かうぜんしの紙、など囃しつゝ、外の方へ出で行くを、行兼見附けて、いかにや窮鬼、我が歌舞の恐ろしきか。といへば、かの鬼立留まりて、あらず、きんぢが舞の手興ありてをかしきを、一人聞かむもさう／＼しければ、かしこへ行きて、友達の限り呼び集めて來むと思ふなり。といふ。行兼、聞くより魂失する心地して、うゝと言ひてのけざまに後へ倒れけり。其の後は如何になりにつむか知らず。

(しみのすみか物語)

十二月十九日
平治元年(一八
一九)

光頼

藤原氏。時に年
三十六。承安三
年。年五十一
(一七八四一
八三三)

信頼

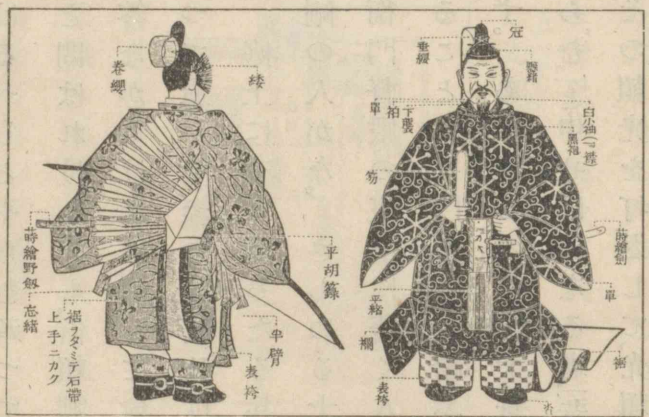
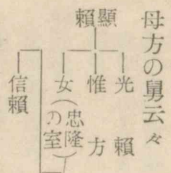
藤原忠隆の第三
子。平治元年源
義朝等と兵を擧
げ敗れて斬られ
た。年二十七。
(一七九三一一
八一九)

五 光頼卿參内

— 平治物語 —

内裏には、十二月十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、このほどは、信頼卿の舉動過分なり」とて、不參にておはしましけるが、參内して承らむ」とて、ことにあざやかなる束帶引繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹巻著せ、雜色の裝束に出で立たせ、自然の事もあらば、人手に懸くな。汝が手に懸けて、光頼が首をば急ぎ取れ」とて、御身近く置き、その外、清げなる雜色四五人召具して、大軍陣を張つて、處々門々を固め、守護しけるを事もせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵共も大きに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて通し奉る。紫宸殿の後を経て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上、藤達、皆下にぞ著かれたる。光頼卿、こは不思議の事かな。

長方
藤原氏。時に年
二十。後、從二位
中納言に至る。
建久三年歿。年
五十三。(一八〇
〇一八五二)



文武官の整裝圖

人はいかに振舞ふとも、あれは右衛門督、我は左衛門督なれば、下には著くまじきものを」と思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそあまりにしどけなう見え候へ」と色代して、しづくと歩み、信頼卿の上にむずと著き給ふ。光頼卿は、信頼卿のためには、母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、特に畏れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて、色を失はれければ、著座の公卿あなあさましと見給ふに、光頼卿は下襲の尻引直し、衣紋繕ひ、笏取直し、氣色して、今日

衛府督
近衛・兵衛・衛
門の役所を總稱
して衛府とい
ふ。こゝでは右
衛門督信頼をさ
す。

頼光
源満仲の長子。
治安元年(一六
八一)歿。
頼信
頼光の弟。永承
三年(一七〇八)
歿。

は衛府督が一座すと見えて候。召に参ぜざらむ者をば、死罪に行はるべしとやらむ承つて参内するところなり。抑、何事の御諛ぞ。と問はれけれども、信頼卿物ものたまはず、著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程経て、光頼卿つい立つて、「悪しう参つて候ひけり」とて、しづくくと歩み出でられけり。庭上に充ち満ちたる兵ども、これを見奉りて、「あはれこの殿は、大剛の人かな。さんぬる十日より、多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人、一人もおはしまさざりつるに、仕出したることよ。門を入り給ふより、いさゝかも臆したる體も見え給はず。あはれこの人を大將として合戦せば、いかばかりか頼もしからむ」と申せば、傍なる者、昔、頼光、頼信とて、源氏の名將おはしましき。その頼光を打返して、光頼と名乗り給へば、これも剛にましますぞかし。」といへば、また傍より、「など、その頼信を打返して、信頼と付き給

見参の板

鳴板ともいつて
踏み鳴らして参
入退去などを知
らせる踏板。

荒海の障子

清涼殿の廣廂に
たてた布障子。

萩の戸

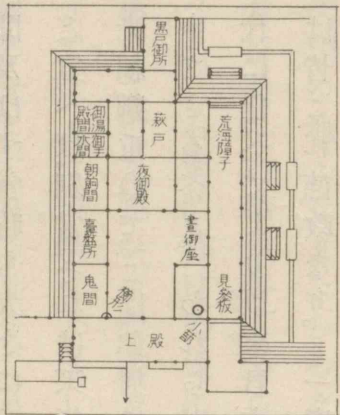
清涼殿の夜の御
殿の北にあたる
部屋。

別當惟方

檢非違使別當。

少納言入道

藤原通憲。入道
して信西とい
ふ。平治元年(一
八一九)信頼の
ために殺され
た。



清涼殿の圖

ふ右衛門督殿は、あれほどの臆病にはおはしませんぞ。」といへば、壁に耳、天に口といふことあり。おそろし、おそろし、聞かじ。」といひながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。

光頼卿、かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小薙の前、見参の板、高らかに踏み鳴らし、て立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはし、ましけるを、招き寄せ宣ひけるは、「公卿、僉議とて催されつる間、参じたれども、承り定めたることもなし。誠やらむ、光頼も死罪に行はるべき人数にてあなる。傳へ承る如きは、その人皆當時の有識、然るべき人共なり。その内に入らむこと、甚だ面目なるべし。」さて、先日、右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道

神樂岡
京都市左京區に
ある。

勸修寺内大臣
藤原高藤。正三
位内大臣に至
る。

三條右大臣
高藤の子定方。
從二位右大臣に
至る。

英雄
英雄家の略。公
卿の家格の名。

大貳清盛
平清盛をいふ。
當時は太宰大貳
であつた。

切目ギリ
切目は和歌山縣
日高郡にある
村。此處に切目
の王子といふ社
が在る。

が首實檢の爲に、神樂岡へ向はれける事は如何に。以ての外然るべからざる舉動かな。近衛大將檢非違使別當は、他に異なる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乗り給ふこと、先蹤もいまだ聞及ばず、當時も大きに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならず。と宣へば、別當、それは天氣にて候ひしかば、とて赤面せられけり。光頼卿重ねて、こは如何に、勅諭なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。われらが曩祖勸修寺内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより、以來、君すでに十九代、臣また十一代、承り行ふ事は皆これ徳政なり。一度も惡事に從はず。當家は、させる英雄にはあらざれども、ひとへに有道の臣に伴なつて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝほどの事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣にかたらはれて、累家の佳名を失はむこと、口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目

主上
二條天皇。
黒戸の御所
清涼殿の北方に
ある殿舎。
上皇
後白河上皇。
一本御書所
内裏の殿舎の
一。
内侍所
神鏡を申す。
溫明殿
紫宸殿の東方に
在る。
夜のおとど
天皇寢御の御
室。
朝餉アサカヒ
朝餉の間の略。
朝夕の御食事を
聞し召すとこ
ろ。
楯形の穴
殿上の間の北側
にある小さい
窓。

の宿より馳せ上るなるが、和泉紀伊伊賀伊勢の家人等、待受けて馳せ加はり、大勢にてあなる。信頼卿がかたらふところの兵、いくばくならじ。平家の大勢押寄せて攻めむには、時刻をや廻らすべき。若しまた火などを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらむだにも、朝家の御歎なるべし。如何に況や、君臣共に、自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし。右衛門督は、御邊に大小事を申し合はすとこそ聞ゆれ。相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて、主上は何處におはしますぞ。黒戸の御所に。上皇は。一本御書所に。内侍所は。溫明殿に。劍璽は何處に。夜のおとどに。と左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。また、朝餉の方に人音のし、楯形の穴に人影のしつるは何者ぞ。と宣へば、それには右衛門督住み候へば、その方さまの女房などぞ、影ろひ

候ふらむ」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は、今はかう
 ごさんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒
 戸の御所に遷し参らせたるなり。末代なれども、さすが日月は未
 だ地に墮ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は王法をば如何に守
 り給ひぬる。そ、異國には、かやうの例ありといへども、わが朝には
 未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。とて、のろ
 のろしげに憚る所なく口説き給へば、惟方は人もや聞くらむと、よ
 にすさまじげにて立たれけり。光頼卿、且は悲しくて、我、如何なる
 宿業によつて、かゝる世に生れ會ひ、憂き事をのみ見聞くらむ。昔
 の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かむ輩は、耳をも目をも
 洗ひぬべくこそ侍れ。とて、上の衣の袖絞るばかりに泣かれけり。
 信頼の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君
 の御事を悲しみて、打萎れてぞ出で給ひける。
 (平治物語)

レオレレ

平治物語

二條天皇の平治元年(一一八一)藤原信頼と信西と威勢を争つて兵亂を起し、共に滅亡に歸した顛末を記した軍記物語。作者未詳。

六 おらが春

小林一茶

一 おらが春

昔、丹後の國普甲寺といふところに、深く淨土を願ふ上人ありけり。年の始めは、世間は祝事をしてさ々めければ、我もせむとて、大晦日の夜、ひとり使へる小法師に、手紙したゝめ渡して、あすの曉にし、かじかせよと、きと言ひをしへて本堂にとまりにやりぬ。

小法師は、元日の旦、いまだ隅々は小暗きに、初鶏の聲と同じく、がばと起きて、教のごとく表門を丁々とたゞけば、内より「何處より」と問ふ時、西方彌陀佛より、年始の使僧に候。と答ふるよりはやく、上人はだしにて躍り出で、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上座に請じて、きのふの手紙をとりて、恭しく押戴きて讀みて曰く、
 それ世界は衆苦充滿に候間、はやく我が國に来るべし。 聖衆

小林一茶

名は信之。通稱彌太郎。俳人。信濃の國(長野縣)の人。文政十年(一八二八)年、六十五(一四二三)一(四八七)普甲寺、京都府與謝郡にあつた寺。

出迎へて待入り候。と讀終りて、おゝくと泣かれけるとかや。この上人、自ら企みこしらへたる悲しみに、自ら嘆きつゝ、初春の淨衣を絞りて、滴る涙を見て祝ふとは、ものに狂へる様ながら、俗人に對して無常をのぶるを禮とすると聞くからに、佛門に於ては祝の骨頂なるべし。

それとは些か變りて、己等は俗塵に埋れて世渡る境涯ながら、鶴龜にたぐへての祝づくしも、厄拂の口上めきてそらくしくおもほゆれば、から風の吹けば飛ぶ屑屋は、屑家のあるべきやうに、門松立てず、煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあなた任せになむ迎へける。

めでたさも中位なりおらが春
 こぞの五月に生れたる我が娘に、一人前の雜煮の膳を据ゑて、
 這へ笑へ二つになるぞ今朝からは
 (おらが春)

こぞ
 去年、文政元年
 (二四七八)をさ
 す。
 おらが春
 佛書。文政二年
 正月より同年十
 二月までの雜感
 や發句を記した
 もの。一茶の代
 表的な著作。

二つ雀の子

やせ蛙まけるな一茶これにあり
 悠然として山を見る蛙かな
 雀の子そこのけそこのけ御馬が通る

名月の御覽の通
 り屑家哉
 一茶

筆茶一

鳴く猫に赤ん目をして手鞠かな
 けろりくわんとして鳥と柳かな
 母馬が番して飲ます清水かな

大螢ゆらりくと通りけり
 罷り出でたるはこの藪の墓にて候
 鶉の真似は鶉より上手な子どもかな
 山寺や縁の上なる鹿の聲
 有明や浅間の霧が膳を這ふ
 一人と帳面につく夜寒かな
 掠鳥と人に呼ばるゝ寒さかな
 ずぶぬれの大名を見る炬燵かな
 大根引大根で道を教へけり
 寒念佛さては貴殿でありしよな

東山道

我が國の八道の
 一。東海北陸兩
 道の間に夾り、
 畿内(京都の周
 圍の地方)から
 東方山間の諸國
 を連ねて奥羽地
 方に至るもの
 つるまの郡あた
 らしの郷
 假設の地名。

遠侍

トホザムラヒ。
 中門の廊などに
 設けた侍の詰
 所。

釣殿

池に臨んだ殿
 舎。

梅壺・桐壺・籬が
 何れも内裡の庭
 に擬した名稱
 で、籬が壺とい
 ふのは内裡には
 ない。
 しゆでん
 主殿。寢殿のこ
 と。

七 物ぐさ太郎

—御伽草子—

東山道道の奥の末、信濃の國十郡のその内に、つるまの郡あたらしの郷といふ處に、不思議の男一人侍りけり。其の名を物ぐさ太郎ひぢかずと申し候。名を物ぐさ太郎と申すことは、國に並びなき程の物ぐさなり。但し名こそ物ぐさ太郎と申せども、家づくりの有様、人に勝れてめでたくぞ侍りける。四面四町に築地をつき、三方に門を立て、東西南北に池を掘り、島を築き松杉を植ゑ、島より陸地へ反橋をかけ、高欄にぎぼうしを磨き、まことに結構世にこえたり。十二間の遠侍九間のわたり廊下、釣殿、細殿、梅壺、桐壺、籬が壺にいたるまで、百種の花を植ゑ、しゆでん十二間につくり、檜皮葺に葺かせ、錦をもつて天井をはり、桁うつばりたる木のくみ入れには、白銀・黄金を金物にうち、瓔珞の簾をかけ、麿さぶらひ所にいたるま

さぶらひ所
侍の詰所。遠侍
内侍等がある。

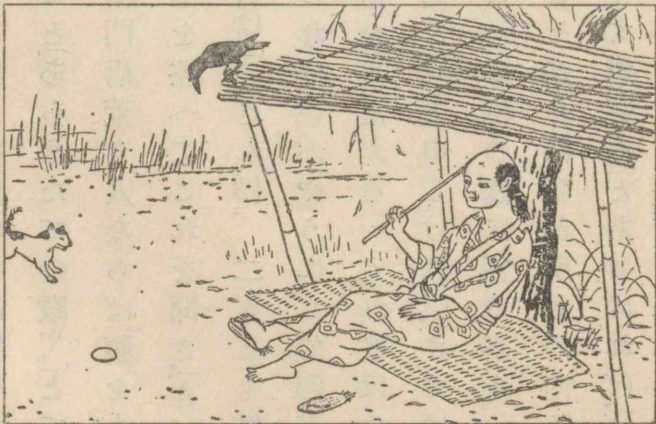
もとあいきやう
のもちひ
餅。祝儀のくばり

で、ゆゝしく作り立てて居ばやと、心には思へども、色々こと足らねば、たゞ竹を四本たて、薦をかけてぞ居たりける。雨の降るにも、日の照るにも、習はぬすまひしてゐたり。もとでなければ商ひせず、物を作らねば食物なし。四五日のうちにも起きあがらず、ふせりゐたりけり。

或時なさけある人の、もとあいきやうのもちひを五つ、いかにひだるかるらむとて得させければ、たまさかに待ち得たる事なれば、四つをば一度に食ひ侍り。今一つを、心に思ひけるやうは、ありと思ひて喰はねば、後の頼みあり、無しと思へばひだるくなけれども、頼みなし、まぼらえてあるも頼みなり、いつまでも人の物を得させむまでは、持たばやと思ひて、寝ながら胸の上にて遊ばかして、鼻油をひきて、口にぬらし、頭に戴き、とり遊ぶ程に、とりさらかし、大道までぞ轉びける。その時、物ぐさ太郎見渡して思ふやう、取りに行き

かへらむも物ぐさし、いつの頃にても、人の通らぬ事はあらじと、竹の棹を捧げて、犬鳥のよるを追ひのけて、三日まで待つに人見えず。三日と申すに、たゞの人にはあらず、その所の地頭あたらしの左衛門尉のぶよりといふ人、小鷹狩にましろの鷹をすゑさせて、其の勢五六十騎にて通り給ふ。

物ぐさ太郎これを見て、鎌首もちあげて、なう、申し候はむ、それにもちひの候、取りてたび候へ」と申しけれども、聞入れず打通りけり。物ぐさ太郎これを見て、世間にあれ程



物 ぐ さ 太 郎

物ぐさき人のいかにして所知所領をしるらむ。あのもちひを馬より下りて、取りて傳へむ程の事はいと易き事、世の中に物ぐさきもの、我一人と思へば多くありけるよと、あらうたての殿や」とて、斜ならず呟き、腹をぞ立てにける。左衛門尉荒き人ならば腹をも立て、いかやうにもあたり給ふべきに、馬を控へてこれを聞き、きやつめが事か、聞ゆる物ぐさ太郎といふ者は、「さん候。二人とも候はばこそ。これが事にて候。」さて、おのれはいかやうにして過ぐるぞ。「さん候。人の物をくれ候時は、何をもたぶる。くれ候はぬ時は、四五日も十日ばかりも只空しく過ぎ候」と申しければ、さては不便の次第かな。命助かる仕度をせよ。一樹の蔭に宿る事も、一河の流を汲む事も、他生の縁となり、處こそ多きに我が所領の内に生れあふ事、前世の宿縁なり。地を作りて過ぎよ」とありければ、「もち候はず」と申す。「さらば取らせむ」とあり。「物ぐさく候程に、地もほ

しからず候」と申せば、「商ひをして過ぎよ」とあれば、「もとで候はず」と申す。「取らせむ」とありければ、「今更習はぬ事、知らぬ事成りがたく候」と申せば、「さては、かゝるくせ者かな、いでさらば助かるやうにせむ」とて、硯を取りよせて札を書きて、我が領内を廻す。此の物ぐさ太郎に毎日三合飯を二度食はせ、酒を一度飲ますべし。さなからむ者は我が領には叶ふべからずと、ふれられけり。實に實にこれぞ、あはぬは君の仰せかなとは思へども、かくの如くある程に、三年ぞ養ひける。

(御伽草子)

御伽草子
二十三卷、中古
以來の草子物を
集めたもの。

夏目漱石

名は金之助。英
文學者、小説家。
東京の人。大正
五年歿、年五十。
神田
東京市神田區。

八 處世の道

夏目漱石

毎々御面倒相願候處、早速神田の方へ御送り下され候由、多謝の至りに候。

學校を卒業して一日のうち、世の中が恐ろしくなつたから、これから餘程注意を周密にする由、結構に候。

併し周密といふ意味に上等と下等とあり。自己の智力にて出

來得る限り考へ、自己の感情にて出來得る限り感じ、而して相手

と自己とに不都合の破綻なき様にするを上等といひ、唯人を見

て泥棒の如く疑ひ、何でもこそと先を制する様な事を得意

とする、これを下等の周密といふべく候。

君の感じたるは如何なる方面に於ての意味なるや知らず。若

し前者ならば、賢の方へ一步進みたるなり。若し後者ならば、愚

ハタン

の方へ一步進みたるなり。世上幾多の才子は、愚に近づきつゝ、

自ら賢に進むと思へり。利害の關係なき三者より、忌憚なく是

等の人を評して見よ。學校に居るうちの方が遙かに上等にし

て、卒業して世の中に居る時の方が餘程下等なり。然も自らは

頗る賢くなりたる如く考ふる人多し。是程いやな現象は之な

く候。

世の中が恐ろしき由、恐ろしき様なれど存外恐ろしからぬもの

なり。若し君の弊を言はば、學校に居るときより世間を恐れ過

ぎて居る事なり。君は家に在りて親父を恐れ過ぎ、學校に在り

て先生と朋友とを恐れ過ぎ、卒業して世間を恐れ過ぐ。その上

に世の中の恐ろしきを悟らば、却つて困る位に候。恐ろしきを

悟る者は用心す。用心は大概の場合、人格を下落せしむるもの

なり。世上の所謂用心家を見よ。世を渡る事は即ち巧みなら

自らかへりみて
云々
孟子に、「自反
ナホクシバ、
而縮、雖三萬
人、吾往矣。」
とある。

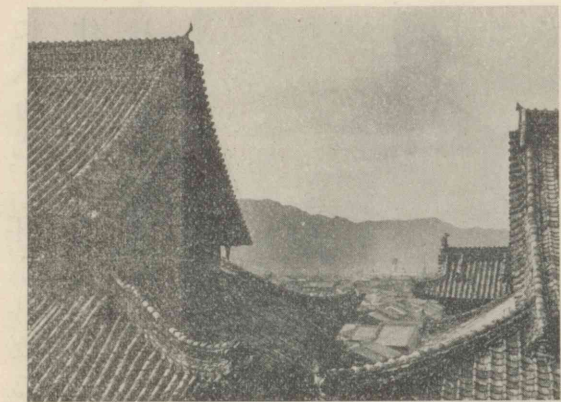
ん。然も親友となし得べきか。大事を託し得べきか。利害以上
の思慮を闘はずに足るべきか。世を恐るゝは非なり。生れたるこの世が恐ろしくては生き居
るのが苦しかるべし。余は君にもつと大膽なれと勸む。世の
中を恐るなと勸む。自らかへりみて直くんは千萬人といへど
も我行かんといふ氣象を養へと勸む。天下は君の考ふること
く恐るべきものにはあらず。存外太平なるものなり。唯一箇
所の地位が出来るか出来ぬか位にて、天下は恐ろしくなるべき
ものにあらず。どこ迄行きても恐るべきものにあらず。免職
と増俸以外に人生の目的なくんば、天下は或は恐ろしきものか
も知れず。天下の士、一代の學者は、それ以上に恐ろしき理由を
口にせずんば恥辱に候。勉旃勉旃。

(漱石全集)

九 朱纒の葉蔭

佐佐木信綱

一 夢の國——長崎——



支那寺の見長る崎の街

船より望みし傾斜状の町並もことやうに、上陸して踏みゆく街
路の土も、奈良の土はた江戸の土とは、
異なりたる香ぞする。諏訪神社に近
き友の家を訪へば、待ち喜びてのほぎ
酒に、添へたる鱧子もなつかしかりき。
想へばその夜の夢こそあやしくも
恐ろしかりしか。大祭の傘鋒を見む
と集ふ唐人・紅毛人の群を分けて、いつ
しか街上の人となれる吾は、高き紅白
の旗を目標とせる出島の阿蘭陀屋敷

諏訪神社

國幣中社。祭神
は建御名方命・
八坂刀賣命。長
崎市上西山町に
ある。

出島

長崎港内の小
島。江戸時代、
長崎に於ける外
國人の居留地
であつた。

に入りぬ。耳垂れたる犬のうづくまれる門を入るに、かびたんの住居は階上なり。二丈ばかりもある段梯子を上れば、五十疊敷ほどの堂にして、疾風の洋に難破せる船をゑがける額と、大いなるび



(浦大市崎長) 堂主天

いどろ鏡とがかゝれり。曲泉七つ八つをおき、臺の上には、すてれきわあてるの饅竝べられたり。雨戸障子は、びいどろ板もて張られ、半ば天鵞絨の幕にて掩はる。そが隙より見やれば、海に浮べる紅毛船の數々、港にみちて、風に翻る帆のはためきも高し。入津の石火矢の煙のゆくへに見入りて、我を忘れたる後より、繪踏の支度はなれり。とくく。」と促がす長崎役人の聲す。「否、わが宗門は、歌

温泉が嶽
ウンゼンが
原半島の中部に
位する火山。

對馬
長崎縣に屬す
る。朝鮮海峡を
隔てて慶尙南道
に相對する島。

淺茅浦
淺海浦ともい
ふ。

竹敷
長崎縣下縣郡に
ある要港。

なれば。」と答ふれど、それには耳もかさず、來れ、橄欖のかけに。さて温泉が嶽にゆけ。」とせき立つ。折しも臺の上のわあてるは、凄じき音して破裂し、門外の吉利支丹寺の鐘は烈しく鳴りとよみ、階下の犬は一聲高く吠えぬ。

二 繪の島 — 對馬 —

西洋文明の門戸たりし長崎は、わが夢の國なり。
長崎より海上を西北に五十里、濃き紺青の波に洗はれて、深緑の冠せる巖山の國、對馬はそばだてり。南北に連なりて細長き上島、下島は、萬葉歌人に歌はれし淺茅山に近き淺茅浦を包み、いくその小島の眺よき内海に臨みて、竹敷の港あり。海をへだてて朝鮮に間近く、空晴れたる日、山に上れば、かしこの山うすある色に霞めるが見ゆ。こゝしき巖と荒き海との間に生ひ立ち、刀伊、蒙古等が外寇の苦き經驗をあぢはひし島の民は、心に強きところあり。男は

山猫
對馬に産する酒
の名。

仁位

二平。對馬(長崎
縣)下縣郡仁位
村。

彦火火出見尊が
云々

この話は古事記
及び日本書紀に
出てゐる。

小茂田濱

對馬(長崎縣)下
縣郡佐須村小茂
田濱。蒙古來寇
の舊蹟。助國を
祭る小茂田神社
がある。

宗助國

對馬の守護代。
文永十一年(一
九三四)蒙古來
寇の時奮戦して
國難に殉じた。
年六十八。

労働の暇には、口ひびく山猫を好み飲み、炭薪を馬にのせて賣りに
こし山の女は、歸途は自ら之に乗りて歸る。山より涌出づる水は
珠のごとく、谷川こゝかしこに流れて、松杉の緑とこしへに、春は色
白く香りよき風蘭、山蔭の木々ゆ咲きしだりて、高麗雉子の飛立つ
もをかしく、冬は小鳥群れ集ふ椿の木立、花を多くつけたり。夏の
海はいかつり船の漁火沖にみちて、海神の都をしのばしめ、北風吹
きしきりて海荒るゝ秋冬の日には、船に飛入りては人をもつき殺
すてふ恐しき羽魚とらむとて、槍鐵砲など携へたる漁夫は、荒海に
船漕ぎ出だしぬ。下島なる仁位の海神社は龍神を祭れり。彦
火火出見尊が、海幸得まく可憐小汀に至りて、たか垣ひめ垣とゝの
ほり、高殿照り輝ける門の前にして、井のほとり湯津桂の木かげに
立たししてふも、或はこの島ならむか。上島の小茂田濱には、宗助
國を祭れる社あり。蒙古の將洪茶丘、高麗の將金方慶が、戦艦九百

大村

長崎縣東彼杵郡
大村町。大村灣
に面してゐる。

彼杵の海

大村灣。長崎縣。

多良嶽

タラガタケ。大
村灣の東方、長
崎縣・佐賀縣境
にある。南の温
泉嶽に相對して
ゐる。海拔一二
〇〇米。

朱欒

芸香料に屬する
常緑喬木。暖地
に産し、冬季熟
して黄色の果を
結ぶ。

餘艘、海をおほひて寇せし時、迎へ撃ちてうせにし靈を慰むべく、大
祭の日は、鎧著よそへる人々の一列、海に向ひて弓ひくも雄々しき
國ぶりなり。あくまでも色こく彩へられたる海と、山と、歴史と。
美しき南の島、對馬は繪の島なり。

三 歌 の 郷 — 大 村 —

群山の廻れるが中に湖なせる彼杵の海は、美玉をもて名に負ひ
しところ。今も美しき眞珠を出しぬ。長崎より東北にむかひて
十里、大村はやがて彼杵の海にのぞめり。死火山なる多良嶽は、ゆ
るやかなる傾斜をなして、裾野の丘陵起伏せるところに畑あり。
南國ぶりの埴生おほくして、棚畑をなし、朱欒、柑子、枝もたわゝにみ
のれり。西の國の教のはやく芽ざしし地、家居をかこめる石垣、う
るはしき果實、靜かなる海、わたの底に生るゝ眞珠。

大村は歌の郷なり。

(旅と歌と)

一〇 草山の月

尾上柴舟

尾上柴舟
名は八郎。歌人。
國文學者。文學
博士。東京女子
高等師範學校教
授。岡山縣の人。
明治九年生。

草山の肩をながれて満月のひかりはおよぶ谷のさ
霧に

つけすてし野火の煙のあかくと見えゆくころぞ

山はかなしき

若山牧水

若山牧水
名は繁。歌人。
宮崎縣の人。昭
和三年歿。年四
十四。

うす紅に葉はいち早く萌えいでて咲かむとすなり

山ざくら花

うらくと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれ

る山ざくら花

北原白秋

名は隆吉。詩人。
歌人。福岡縣の
人。明治十八年
生。

北原白秋

碓氷嶺の南おもてとなりにけり下りつゝ思ふ春の

ふかきを

深山路はおどろきやすし家鳥の白き鷄かひろに我が遇ひ

にけり

木下利玄

木下利玄

子爵。歌人。岡
山縣の人。大正
十四年歿。年四
十。

この峽にわれ一人なりちかくにてほそく澄める

せゝらぎの音

よべ一夜天つ春雨ゆたかに降り今朝ふかく濡れし

土の色かも

せゝらぎ
淺瀬などに水の
流れる音。

前田夕暮
名は洋三。歌人。
神奈川縣の人。
明治十六年生。

前田夕暮
沖つ波うねりは高しひたくと空にふれつゝ日は
晴れにけり
河原邊に這ひもとほれる山葛の若芽はのびて水に
およべり

鳥木赤彦
本名久保田後彦。歌人。長野縣の人。大正十五年歿。年五十。

鳥木赤彦

鳥木赤彦
春雨の雲のあひだよりあらはるゝ山の頂は雪眞白
なり
西吹くや富士の高嶺にゐるくものかたよりにつゝ
一日たゆたふ

齋藤茂吉
醫學博士。歌人。
山形縣の人。明治十五年生。

齋藤茂吉

齋藤茂吉
たゝなづく青山の秀に朝日子の美のひかりはさし
そめにけり
たか原に光のごとく黄鳥のむらがり啼くはたのし
かりけり
神のくにあきつ島やまとあけぼのの光のうちに櫻
はな咲く
白雲は空にうかべり谷川の石みな石のおのづから
なる

熊野

和歌山縣西牟婁郡に在る。

大塔宮

ダイタフノミヤ。護良親王の御事。

二品

ニホン。親王の位階。親王に賜ふ位は一品から四品まである。

笠置

京都府相樂郡笠置村にある山の名。山上の古寺を笠置寺といひ、後醍醐天皇の行在所であつた處である。

般若寺

ハンニヤジ。奈良市奈良坂の南にある律宗の寺。孝徳天皇の朝建立。

主上

後醍醐天皇。

熊野落

一 太平記

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されむ爲に、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城既に落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を踏むおそれ、御身の上に迫りて、天地廣しと雖も御身を隠さるべき處なし。日月明かなりと雖も、長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻にたゞずみて、人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、何處とても御心安かるべき處なかりければ、かくても暫しはと思し召されける所に、一乘院の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけむ、五百餘騎を率ゐて、未明に般若寺へぞ寄せたりける。折ふし宮に付き奉りたる人、一人もなかりければ、一防ぎ防ぎて、落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく兵既



熊野夫須美神社

垣 瑞

虎の尾を踏むおそれ

極めて危険なことに譬へる。書經に「心之憂危若踏虎尾」涉于春氷」とある

鶉の床

こゝはいぶせき床の意。

一乘院の候人

一乗院は奈良にあつたが今はない。候人とは門跡家に使はれる家臣。

按察法眼好專

アゼチハフゲンカウセン

御出

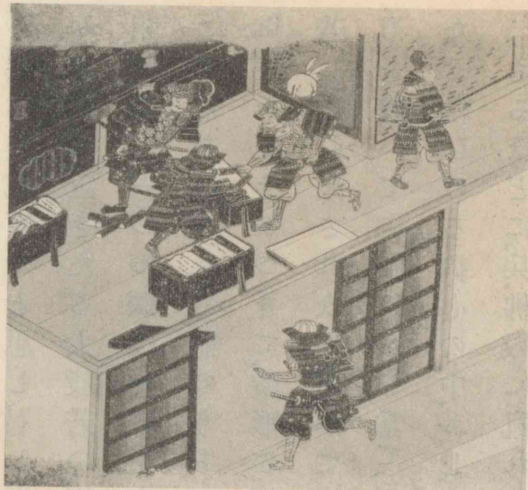
ギョシュツ。貴人の出で行かれること。

おし肌脱がす

大般若經。大般若波羅密多經の略。六百卷。唐の玄奘三蔵の譯。

に寺内に打入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。さらば、よし自害せむと思し召して、既におし肌脱がせ給ひたりけるが、事叶はざらむ期に臨んで、腹を切らむことはいと易かるべし。若しやと隠れて見ばやと思し召し返して、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃は未だ蓋を開けず。一つの櫃は御經を半ば過ぎ取出して蓋をもせざりけり。この蓋を開けたる櫃のうちに御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經を引きかづきて、隠形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出されなば、やがて突立てむと思し召して、氷の如くなる刀を抜いて御腹にさし當て、兵、「こゝにこそ」といはむずる一言を待たせ給ひける御心の中、おし量るもなほ淺かるべし。さるほどに、兵、佛殿に亂れ入つて、佛壇の下、天井の上までも、残る處なく搜しけるが、餘りに求めかねて、これ體の物こそ怪しけれ。

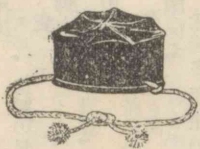
あの大般若の櫃を開けて見よ。」とて、蓋したる櫃二つを開いて御經
 を取出し、底を翻して見けれども、
 おはせず。蓋開きたる櫃は見る
 佛までもなしとて、兵皆寺中を出で
 殿去りぬ。宮は不思議の御命を繼
 のがせ給ひ、夢に道行く心地して、な
 搜ほ櫃の中におはしけるが、若し又
 索 兵立ちかへり、委しく搜すことも
 やあらむずらむと御思案あつて、
 やがて前に兵の搜し見たりつる
 櫃に入替え給ひてぞおはしける。案の如く、兵どもまた佛殿に
 立ちかへり、前に蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なしとて、御經
 を皆打移して見けるが、からくくと打笑うて、大般若の櫃の中を、よ



玄奘三藏
 ゲンザウサンザ
 ウ。支那唐代の
 法相宗の高僧。

十六善神
 大般若經の守護
 神。

頭巾
 トキン。



くよく搜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそお
 はしけれ。」と戯れければ、兵皆一同に笑うて、門外へぞ出でにける。
 是ひとへに摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護による命なりと、
 信心肝に銘じ、感涙御袖を潤せり。
 かくては、南都邊の御隱家も叶ひ難ければ、乃ち般若寺を御出で
 ありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には、光林坊玄
 尊、赤松律師則祐、木寺相摸、岡本三河坊、武藏坊、村上彦四郎、片岡八郎、
 矢田彦七、平賀三郎、彼此以上九人なり。宮を始め奉りて、御供の者
 までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半にせめ、その中に年長ざるを
 先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。
 この君固より龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を
 出でさせ給はぬ御事なれば、御歩の長途は定めて叶はせ給はじ
 と、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習

單皮 タビ。皮製の足袋。
 脚巾 ハギキ。脚絆。
 由良の湊 兵庫縣淡路島の東岸に在る湊。
 濱のふ 常緑多年生の草。夏季白色の花を開く。



藤代 和歌山縣海草郡に在る。
 和歌・吹上・玉津島 共に和歌山縣和歌山市に在る。雨を含める云々。唐の盧綸の詩に「出關愁暮一沾裳。滿野蓬生古戰場。孤村樹

はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮脚巾草鞋を召して、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、懈らせ給はざりければ、路次に行逢ひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むる事なかりけり。

由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の楫緒たえ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、藤代の松に懸れる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に登ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎くならひなるに、雨を含める孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に著き給ふ。

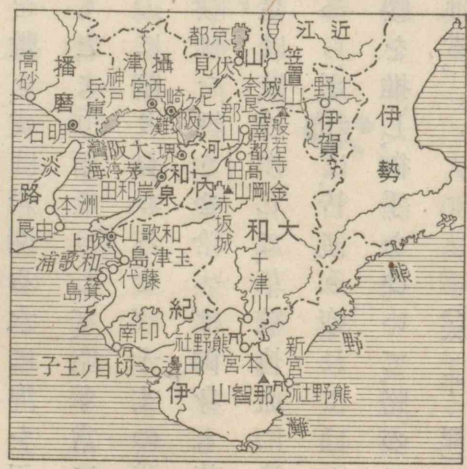
その夜は、叢祠の露に御袖をかた敷きて、終夜祈り申させ給ひけるは、傳へ承る、兩所權現は、これ伊弉諾伊弉冉の應作なり。我が君その苗裔として、いま朝日忽ちに浮雲の爲に隠されて冥闇たり。

色昏殘雨。遠寺鐘聲帶夕陽。とあるにもとづく。
 伊弉諾・伊弉冉の應作 諸尊が兩所權現となつてあらはれ給うたとの意。

角髪 ピンヅラ。みづら。の音便。頭髪を頂から兩方に分けてわがねて下げた結ひ方。

熊野三山 本宮・新宮・那智をいふ。何れも和歌山縣東牟婁郡に在る。
 十津川 奈良縣吉野郡熊野川の上流十津川の沿岸一體の部落。

豈痛まざらむや、玄鑿むなしきに似たり。神若し神たらば、君何ぞ君たらざらむ。と、五體を地に投げて、一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらむと、神慮も暗に計られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御腕を曲げて枕として、暫く御目睡ありける御夢に、角髪結ひたる童子一人來つて、熊野三山の間は、猶も人の心不和にして、大義なり難し。これより十津川の方へ御渡り候ひて、時の到らむを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附け參らせられて候へば、御道しるべ仕るべく候。と申すと御覽ぜられ、御夢は即ち覺めにけり。これ權現の御告なりけりと、頼もし



山路もとより雨なく云々
 唐の王維の「荆溪出白石」天寒紅葉稀山路元無雨空翠濕人衣」とあるによる。
 萬仞の青壁云々
 和漢朗詠集に大江澄明の作として「山復山、何工削成青巖之形、水復水誰家染、出碧潭之色」とあるによる。
 太平記
 四十卷 花園天皇の文保二年(一九七八)から後村上天皇の正平二十二年(一二〇七)に至る五十年間の戦亂のさまを記した書。作者未詳。

く思し召されければ、未明に御悦びの奉幣を捧げ、やがて十津川を尋ねてぞ分入らせ給ひける。
 その道のほど三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に枕を敬て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なうして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば、萬仞の青壁刀に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めたり。數日の間かゝる嶮難を経させ給へば、御身も草臥れ果てて、流るゝ汗水の如し。御足は缺け損じて、草鞋皆血に染れり。御供の人々も、その身鐵石にあらざれば、皆飢ゑ疲れて、はかばかしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手をひいて、路のほど十三日に、十津川へぞ著かせ給ひける。
 (太平記)

瀧澤馬琴
 名は角。江戸時代の小説家。嘉永元年(一八二〇)から一八二七(一八五〇)まで。

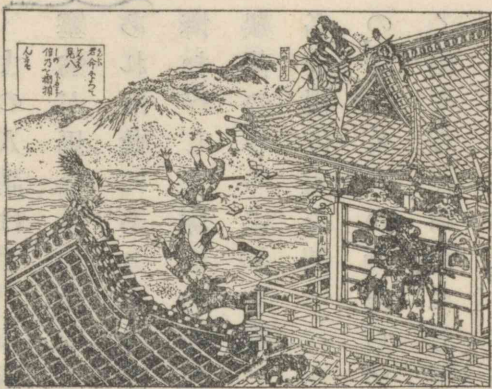
禍福は云々
 漢書賈誼傳に、「禍之與福兮、何異糾纏」とあるによる。
 人間萬事云々
 僧熙晦機の詩に、「人間萬事塞翁馬、推枕軒中聽雨眠」とあるによる。
 福の倚る所云々
 老子に、「禍兮福所伏、福兮禍所伏、孰知其極」とあるによる。
 古河
 茨城縣猿島郡古河

二 閣上の戦

瀧澤馬琴

古の人謂はずや、禍福は糾ふ繩の如し」と。人間萬事、往くとして塞翁が馬ならぬはなし。こは福の倚る所はた禍の伏する所、彼にあれば此にありとは思へども、豫てより、誰かよくその極を知らむ。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言記念の名刀、心に占めつ身につけつ、艱苦のうち年を経て、得難き時を得てしかば、遙々古河へ齎して、名を揚げ家を興すべかりつる、その福は禍と降りかはりたる村雨の、刃はもとの物ならで、我が身を劈く譬とぞなりし、憾をこゝに釋く由もなく、事急にして意外にあり。纔かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、許多の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に、攀ぢ登れども、とにかくに脱れ去るべき道の無ければ、其處に必死を極めたる、心の中は如何なりけむ、思ひ遣るだにいと痛まし。

坂東太郎
利根川の別稱



本版の挿畫

されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月ごろ獄舎に繋かれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀、犬塚信乃を搦めよ。とて、なまじひに擇みいだされつ。他の憂ひをみづからの面目に、今更用ひられむこと、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く彌高き彼の樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで、身をかすませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へ難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、ほてりを渡る敷瓦は、うねり隙なく波に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に入る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫緒絶

鵜 哺乳類中、嘴齒類の一種。前後の肢間に皮膚の膜をなす。膜が一部をなす。飛行する。樹上を飛行する。

鶴 コフ。コフノトリ。鳥類中、涉禽類の一種。丹頂鶴の如く、趾間のもとに小膜がある。全身白色である。

成氏 足利氏持氏の子。鎌倉管領の後古河に住み、公方と稱した。明應六年(一一五七)歿。

墨氏 名は墨、支那周代の學者。墨氏が飛鷹云々。韓非子に、墨子爲木爲三年而成、飛一日而敗。とあるによ

えて、進退既にきはまりし敵にしあれば、いかで我繋ぎ留めむと、鵜の木傳ふ如くさらりと登り果てたる三層の屋根にはまぶしさす由もなく、かたみに隙を窺ひつゝ、睨まへあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巢を、大蛇の狙ふに似たりけり。廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せる、床几に腰を打ちかけて、勝負いかにと見上げたり。又閣の東西には、腹巻したる許多の士卒、槍長刀をきらめかし、或は箭を負ひ弓杖突立て、組んで落ちなば撃留めむとて、項を反してこれを觀る。加之、外方は連綿としてはるかなる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け力衰へず、よく見八に捷ち得るとも、墨氏が飛鷹を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲の梯なれば、地上に下るべくもあらず。彼鳥ならねども羅に入りぬ、獸ならねども狩場に在り。三寸息絶えなば、事みな休まむ、脱れ果てじと見えたりけり。

魯般 姓は公輸、名は般。周代の魯の人。 魯般が雲の梯云

墨子に「公輸般爲雲梯將以攻宋」とあるによる。

膳臣巴提便

カシハデノオミハテビ。欽明天皇の朝の人。百濟に使した時、虎穴に入つて虎を刺殺した。

富田の三郎

和田義盛の臣。源實朝の前で大鹿の角二箇を一度に折つた。

方棟

ハコムネ。

その時、信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで、追登らむとせし兵等を、切落しつるその後は、絶えて近づく者なきに、今唯獨り登り來ぬるは、世におぼえある力士ならむ。きやつはこれ、膳臣巴提便が、虎を暴にせし勇あるか、また富田の三郎が、鹿の角を裂きし功あるか。遮莫一人の敵なり、引組んで刺違へ、死ぬるに難きことやはある。よき敵ござんなれ、目に物見せむと、血刀を袴の稜もて押拭ひ、高瀬の如き方棟に、立つたる儘に寄するを待てば、見八も亦思ふやう、彼の犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり、さりとて、擲めかねて、他の援を借る事あらば、獄舎の中よりこの役儀に、擇み出されし甲斐も無し。擲め捕るとも、撃たるとも、勝負を一時に決せむものをと、思ひにければちつとも擬議せず、「御誼さふ」と呼びかけて、持つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方棟の、左の方より進み登りて、組まむとすれども、寄せつけず。「心得たり」と、鋭き太刀風に、撃

つをはつしと受留めて、拂へば透かさず、^{打込}む刀尖を、支へて流す一上一下、滑る莖を踏留めて、頻りに進む捕手の秘術、彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負を分かざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるはなく、瞬もせず氣を籠めて、見る目もいと遙かなり。さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌増して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音掛聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に闘ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峯の霞か、夏ならばゆふべの虹か、と見るばかりなる、いと高き屋の棟にして、死を争へる爲體、世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖、脇當のはづれを、裏かくまでに切裂かれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續か

で、初めに淺痕を負ひしより、次第に痛みを覺ゆれども、足場を計り

棧閣
カケツクリ。

南總里見八犬傳
五十三卷。瀧澤
馬琴の著。里見
氏の勇士八人の
事蹟を主として
描いた歴史小
説。

て撓まず去らず、疊みかけて撃つ太刀を見八右手に受流して、返す拳こぶしにつけ入りつゝ、やつと掛けたる聲と共に、眉間を望みてはたと打つ。十手をちやうと受留むる、信乃が刃は鏢際より、折れて遙かに飛失せつ。見八得たりとむんずと組むを、そが儘左手に引著けて、かたみに利腕しかと執り、振倒さむとえい聲合せて、揉みつ揉まるゝ力足、これかれひとしく踏滑らして、河邊の方へころゝと、身を輾ばする覆車の俵、坂より落すに異ならず。勾配險しき棧閣に、削り成したる藁の勢ひ、留るべくもあらざめれど、かたみに執つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には入らで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、打ちかさなりつゝ、どうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちやうと張切つて、射る矢の如き早河の眞中まなかへ吐出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。(南總里見八犬傳)

寺田寅彦

號は吉村冬彦。
理學博士。東京
帝國大學教授。
高知縣の人。昭
和十年歿。年五
十八。

一三 科學者とあたま

寺田寅彦

私と親しい或老科學者が、或日私に次のやうなことを語つて聞かせた。

科學者になるには「あたま」がよくなくてはいけない。これは普通世人の口にする一つの命題である。これは或意味では本當だと思はれる。併し一方では、又科學者はあたまが悪くなくてはいけないといふ命題も、或意味では矢張本當である。さうして、此の後の方の命題は、それを指摘し解説する人が比較的少數である。此の一見相反する二つの命題は、實は一つのものの互に對立し共存する二つの半面を表現するものである。此の見掛け上のパラドックスは、實は「あたま」といふ言葉の内容に關する定義の曖昧

不鮮明から生れることは勿論である。



論理の連鎖の唯一つの環をも取失はないやうに、又混乱の中に部分と全體との關係を見失はないやうにする爲には、正確で且つ緻密な頭腦を要する。紛糾した可能性の岐路に立つたときに、取るべき道を誤らない爲には、前途を見透す内察と直觀の力を持たなければならぬ。即ち此の意味では、たしかに科學者は「あたま」がよくなくてはならないのである。

併し、又普通に所謂常識的に分り切つたと思はれることで、さうして、普通の意味で所謂あたまの悪い人にでも容易に分つたと思はれるやうな尋常茶飯事の中に、何かしら、不可解な疑點を認め、さ

うして其の闡明に苦吟するといふことが、單なる科學教育者には兎に角、科學的研究に従事する者には、更に一層重要必須なことがある。此の點で科學者は、普通のあたまの悪い人よりも、もつともつと物分りの悪い呑込みの悪い田舎者であり、朴念人でなければならぬ。

所謂あたまのよい人は、いはば脚の早い旅人のやうなものである。人より先に人の未だ行かない處へ行き著く事も出来る代りに、途中の道端或は一寸した脇路にある肝心なものを見落す恐がある。あたまの悪い人、脚ののろい人が、ずつと後からおくれて来て譯もなく其の大事な寶物を拾つて行く場合がある。あたまのよい人は、云はば富士の裾野まで来て、其處から頂上を眺めただけで、それで富士の全體を呑込んで東京へ引返へすといふ心配がある。富士は矢張り登つて見なければ分らない。

あたまのよい人は、見通しが利くだけに、あらゆる道筋の前途の難關が見渡される。少くも自分でさういふ氣がする。その爲にやゝもすると、前進する勇氣を沮喪し易い。あたまの悪い人は前途に霧がかゝつてゐる爲に、却つて樂觀的である。さうして難關に出遭つても存外どうにかしてそれを切抜けて行く。どうしても抜けれない難關といふのは極めて稀だからである。

それで研學の徒は、餘りあたまのよい先生にうつかり助言を乞うてはいけない。屹度前途に重疊する難關を一つ／＼丹念に枚擧されて、さうして自分の折角樂しみにしてゐる企圖の絶望を宣告されるからである。委細構はず著手して見ると指摘された難關は、存外樂に始末がついて、指摘されなかつた意外な難點に出逢ふこともある。

あたまのよい人は、あまりに多くあたまの力を過信する恐がある。あたまのよい人は、あまのよい人が考へて、はじめから駄目にきまつてゐるやうな試みを一所懸命につゞけてゐる。やつと、それが駄目と分る頃には、大抵何かしら駄目でない他のものの絲口を取上げて居る。それは、はじめから駄目な試みを敢へてしなかつた人には、決して手に觸れる機會のないやうな絲口である。

其の結果として、自然が吾々に表示する現象が自分のあたまで考へたことと一致しない場合に、自然の方が間違つてゐるかのやうに考へる恐がある。まさかそれほどでなくても、さういつたやうな傾向になる恐がある。これでは自然科学は自然の科學でなくなる。一方で又自分の思つたやうな結果が出たときに、それが實は思つたこととは別の原因の爲に生じた、偶然の結果でありはしないかといふ可能性を吟味する大事な仕事を、忘れる恐がある。

あたまの悪い人は、あたまのよい人が考へて、はじめから駄目にきまつてゐるやうな試みを一所懸命につゞけてゐる。やつと、それが駄目と分る頃には、大抵何かしら駄目でない他のものの絲口を取上げて居る。それは、はじめから駄目な試みを敢へてしなかつた人には、決して手に觸れる機會のないやうな絲口である。

場合も少くない。自然は机の前で手を束ねて空中に畫を描いて居る人からは逃出して、自然の眞中へ赤裸で飛込んで来る人になり、其の神祕の扉を開いて見せるからである。科學の歴史は、或意味では錯覺と失策の歴史である。偉大なる迂愚者のあたまの悪い、能率の悪い、仕事の歴史である。頭のよい人は批評家に適するが、行爲の人にはなりにくい。凡そ此の行爲には、危険が伴ふからである。怪我を恐れる人は、大工にはなれない。失敗を怖がる人は、科學者にはなれない。科學も矢張あたまの悪い、命知らずの、死骸の山の上に築かれた殿堂であり、血の河の畔に咲いた花園である。一身の利害に對して頭のよい人は戰士にはなりにくい。頭のよい人には、他人の仕事のあらが眼につき易い。其の結果として、自然に他人のする事が愚かに見え、従つて自分が誰よりも

賢いといふやうな錯覺に陥り易い。さうなると自然の結果として、自分の向上心に弛みが出て、やがて其の人の進歩が止まつてしまふ。頭の悪い人には他人の仕事が大抵みんな立派に見えると同時に、又えらい人の仕事でも自分にも出來さうな氣がするので、おのづから自分の向上心を刺戟されるといふこともあるのである。

此の老科學者の世迷言を讀んで、不快に感ずる人は、屹度羨むべき優れたあたまのよい科學者であらう。又これを讀んで會心の笑をもらす人は、又屹度羨むべくあたまの悪い立派な科學者であらう。

(物質と言葉)

徳富蘇峰
名は猪一郎。評
論家。貴族院議
員。熊本縣の人。
文久三年生。

象山

佐久間氏。信濃
(長野縣)松代藩
士。幕末の志士。
元治元年横死。
年五十四。(二四
七)一、二五二
四)

松陰

吉田氏。名は矩
方。長州(山口
縣)秋津藩士。幕
末の志士。安政六
年刑死。年二十
九。(二四九)一
二五一九)

省儻録

セイケンロク。

蹈海云々

危険を冒して渡
米しようとした
ことをさす。

七箇月

安政元年四月か
ら十月までをい
ふ。

一四 象山と松陰

徳富蘇峰

嘗て勝海舟翁に聞く。翁の壯なるや、佐久間象山の家^時に於て一
個の書生を見る。鬢髮蓬に似て癯骨衣に勝へざる如く、而して小
倉織の短袴を著く。曰く、是吉田寅次郎なり。と。若し松陰の壯年
以後に、彼に及したる個人的勢力の大なるものを求めば、象山を以
て其の重なる一人とせざるべからず。故に松陰を知らんと欲せ
ば、勢ひこの人を知るを要す。

人は自ら知るより明かなるはなし。彼が人物は一部の省儻録
之を語りて餘りあり。蓋し、此の書は、彼が松陰蹈海の罪に坐して
獄に繋がれし七箇月間の感想を、赦免後追懐しつゝ、記録したるも
のにして、恰も松陰の幽室文稿と其の趣を同じうす。唯、幽室文稿
は、安政三年の正月より六年の五月江戸に檻送せらるゝまで、三箇

安政三年
孝明天皇の御
代。(二五一六)

瑕瑜相掩ふ



佐久間象山 池上秀敬筆

年半の記録なれば、其の記事の詳略精粗は同日の論にあらず。然
れども幽室文稿が活きたる松陰の自傳たるが如く、省儻録は活き
たる象山の精神的影像なり。彼が血を以て書かれたる懺悔録な
らば、此は鋼筆を以て鑄られたる記念碑なり。若し松陰の不息不
休自ら禁ずる能はざるところ、其
の活動的精神の沸騰するところ、
其の恐ろしきほど眞摯なるとこ
ろ、其の天地をも動かさんとする
程熱心なるところ、其の天真爛漫
にして瑕瑜相掩はざるところ、悉
く舉げて幽室文稿にありとせば、象山の、天下皆是とするも之を信
ぜず、天下皆非とするも之を疑はざる其の自信力、自ら造化の寵兒
を以て任じ、天民の先覺を以て居る其の大抱負、矜莊自ら喜び、巍々

堂々たる其の風采、古今に通じ天人を極めたる其の博識、空想を賤し、實學を務め、飽くまで經驗的知識を重んずる其の卓見、悉く擧げて省譽録にありとせざるべからず。二者の相異なるは、猶二人の相同じからざるが如し。

象山の象山たるは、己が信ずるところを公言せずんば敢へて休せざる光明なる意氣と、己が信ずるところにあらざれば、之を公言する能はざる正大なる精神とにあり。彼嘗て歌うて曰く、「こゝろみにいざや呼ばはん山彦のこたへだにせば聲は惜しまじ」と。是豈勸化の好手段は、反響の來るまで絶叫するにあり」といふオーコンネルの言と其の意を同じうして、しかも其の趣更に深きものにあらずや。此の點に於て、松陰は眞個に象山の弟子たるに愧ぢざるなり、象山は眞個に松陰の師たるに愧ぢざるなり。松陰謂へらく、象

オーコンネル
アイルランドの
政治家、(一七七
五—一八四七)

山は畢竟洋學を齎ぎて自ら給する賣儒ならん」と。乃ち平服のままにて其の門に入る。象山儼然として曰く、「貴公は學問する積りか、言葉を習ふ積りか。若し學問する積りならば、弟子の禮を執りて來れ」と。松陰乃ち歸りて衣服を改め、上下を著し、鞠躬如として其の門に入れり。當時、松陰は二十二歳の青年にして、象山は四十一歳の宿儒なり。而して象山の盛名、蔚として天下を掩へり。會見後、松陰人に語つて曰く、「我、山に於ては富岳の高きを見、水に於ては遠州洋の深きを見、人に於ては佐久間先生を見たり」と。入門の始め、松陰は漢蘭學藝の事を學ぶに専らなりしが、後遂に天下の大勢をこれに問ふに至りぬ。彼等の性質は固より相同じからず、其の年齢も亦相距ること十有九。松陰は率直に過ぐる程率直なり、象山は莊重に失する程莊重なり。松陰は蓬頭亂髮、木綿服に小倉織の短袴を著し、象山は總髮長髯、綸子の被風を纏ひ、儼乎として虎

殷々聞々在遠空。密雲不雨日。沉紅。雷公有。意蘇。天下。只向山中。起龍。象山

殷々聞々在遠空密雲
不雨日沉紅雷公有意蘇
天下只向山中起龍

筆山象間久佐

精粗を擇む所なきも、象山は隻句すら奉書紙にあらざれば書せず。松陰は謙虚人になりて益を求め、

禮儀三百威儀三千。中庸に「優々大哉。禮儀三百、威儀三千、待其人而後行。」とあるによる。

象山は昂然天下の師を以て自ら居る。松陰は赤裸々の心事を赤裸々に發表すれども、象山は苟も人に許さず、甚だ一笑一顰を吝み、禮儀三百、威儀三千の中に高く自ら標置す。松陰は質樸なるを以て英雄の本色となし、象山は質樸ならざるを以て英雄の本色となす。其の相反する、實にかくの如し。而して其の相反するは即ち相得る所以なるか。松陰曰く、象山高突兀雲翳可仰難。何日天風

亡邸

松陰が自邸を亡げ出し嘉永四年十二月東北諸國を遊歴したことをいふ。

去年の事

嘉永六年松陰が海外渡航を企てて失敗した事をいふ。

秋旻に云々

象山が松陰を送る詩に「送行出郭門孤鶴横秋旻」とある句による。秋旻は秋の空。

起、快望、俊猊、蟠と。彼等の關係又以て知るべきにあらずや。松陰が、亡邸後更に十年の遊學を請うて再び江戸に出づるや、時勢は一層の切迫を來し、二人は一層の親密を來せり。而して彼の蹈海の擧が、象山の慇懃に出でたるは火を視るよりも明かなり。象山がこれに連坐して幽囚の身となれる、豈偶然ならんや。彼等の江戸獄中にあるや、唯法廷に於て相見るを得るのみ。然れども其の唱和の詩を讀めば、人をして感嘆に堪へざらしむるものあり。象山曰く、「寄語吾門同志士、勿因榮辱負初心」と。松陰答へて曰く、「已把死生付餘事、寧因榮辱負初心」と。其の赤誠を以て相許すに至りては、天も亦泣くべし。「かくとしも知らでや、去年のこの頃は君をそらゆく田鶴にたとへし」と。是、象山が去年の事を思ひ、獄中に在りて松陰に與へたるもの。彼等は今や秋旻に横たふ孤鶴ならで、鐵網に悲鳴する癡雞となれり。

傳馬町 今の東京市日本橋區小傳馬町一丁目。

臣罪如山 今日行檻與何顏 拜帝京上林 陰雨愁難露東海風波險未平 無補靖洲千載業空偷盜簡百年名極知汝痛加人痛眞淚神交隔世情

長州 山口縣の一部。龍水 天龍川のこと。信濃の國のこと。野山の獄 長門の國(山口縣)秋城にあつた牢獄。平翁 象山のこと。象山は本姓平氏、故に平翁といふ。

臣罪如山 今日行檻與何顏 拜帝京上林 陰雨愁難露東海風波險未平 無補靖洲千載業空偷盜簡百年名極知汝痛加人痛眞淚 神交隔世情

吉 隔つること三百里、毎に鶴唳雁語を聞き、俯仰徘徊自ら措く能はず」と。又、檻興して東海道を過

ぎ、長州に歸るや、歌うて曰く、龍水從信來、無情却有情。欲問故人事、只爲激怒聲」と。彼は野山の獄中に在りて、常に象山に倦々たりき。彼は象山に對して師弟の誼あるのみならず、知己の感頗る深かりき。曰く「平翁眞吾師、期我以非常」と。彼が先師といふは唯山鹿素行あるのみ、吾が師といふは唯象山あるのみ。彼は其の詠懷にお

ハリス 米國總領事。(一八〇四—一八七八) 桂小五郎 後の木戸孝允。

安政の大獄 安政五年(一八二五—一八) 大老井伊直弼が尊王攘夷論者を嚴罰に處したことをいふ。

いて屢、象山を稱ふるのみならず、安政四年ハリス江戸に入る月においては、書を江戸にある桂小五郎に送り、「夫象山先生天下之士、當爲天下之用。今而不用、天下其謂之何」といひ、以て象山解放の斡旋を促したりき。彼は又安政六年四月二十五日、書を象山に與へて、「幕府諸侯何處可恃。神州恢復何時下手。丈夫死處何處最當」の三條を問ひ、且曰く、「僕今生無益、死無處。進退維谷。幸進之道」と。されど、彼は其の教を聞くに及ばずして死處を得たり。何となれば、其の五月二十五日は即ち彼が安政の大獄に羅織せられて東上したる日なればなり。

象山は色黒く眼大なる藤田東湖の如く、天下の萬波を捲起し、之に鞭ちて快奔する底の破壊的の手腕を有せず。彼は徹頭徹尾建設家經綸家なり。彼の友勝海舟、彼を評して曰く、「先生博學多識、文武を兼ね、末技小藝と雖も通曉せざるなし。人となり英邁不群、

フランクリン
政治家・外交家。
米國の人。(一七
〇六一一七九
〇)

諸葛孔明

名は亮。支那三
國時代の蜀の名
將。建興十二年
歿。年五十四。
(西曆一八一
二三四)

防長

周防・長門の二
國。今の山口縣
全部。

一見其の偉人なるを知る。」と。然れども人情の表裏を察し、大勢の機微を視、立談の間に天下の時艱を濟ふ大作用に至りては、未だ彼に許さざるもの如し。彼自ら曰く、「格物之於天地造化、却易於人情世故、却難。吾人須不可狂其所易而倦其所難」と。顧ふに、彼自ら其の短所を知りたるか。彼は四角なるフランクリンなり、彼は主我的にして動もすれば窮屈なる諸葛孔明なり。然れども其の敢へて第二流を以て自ら甘んぜざる大抱負に至りては、亦欽すべきものなくんばあらず。彼曰く、「予年二十以後、乃知匹夫有繫一國。三十以後、乃知有繫天下。四十以後、乃知有繫五世界」と。嗚呼彼の自信の何ぞそれ深き。彼の抱負の何ぞそれ大いなる。

運命は實に奇なるものなり。彼が九年の廢錮より起ち、幕府の徵命に應じ、和親開港、公武合體の政策を獻じ、公武の間に奔走するや、松陰によりて點火せられたる防長の尊攘黨は地を捲いて京都

山階宮

晃親王。

元治元年

孝明天皇の御代。(一五二四)

久坂義助

松陰の妹婿。長州藩士。幕末の志士。元治元年京都の蛤御門の戦に戦死。年二十六。(二四九九—二五二四)

義卿

松陰の字。

に押寄せ、今や時局打破の大活劇を演ぜんとしつゝありき。彼は京都にあり、將に開港の上書を袖にして山階宮に至らんとし、途に暗殺せらる。これ實に元治元年七月十一日にして、松陰の徒久坂義助が兵を提げて京都に入らんとするに先だつこと僅かに九日なりき。

松陰の刑せらるゝや、其の絶命詞傳へて象山に至る。象山潸然として泣いて曰く、「義卿は事業に急なり、今や此の如し」と。既にして又慨然として曰く、「我本一丈夫、豈忘喪其元」と。

之を要するに、象山と松陰とは、其の趨向相異なりと雖も、各、其の身を捧げて其の信ずるところに殉じたり。又以て大丈夫たるに於て愧ぢずといふべし。

(吉田松陰)

後藤新平

伯爵。政治家。
岩手縣の人。昭
和四年歿。年七
十三。

一五 海外發展の要諦

後藤新平

肇國以來、悠久たる年月を送り迎へて、特殊なる地理を背景とし、特殊なる文明の綾を織成し、特殊なる生活劇を演じ來れるもの、これ我が日本民族である。實に我が日本民族は、その特殊なる背景の前に展開した萬古不易の國體と、東西無比の民族性をもつてゐる。のみならず、軀ては世界的大發展を遂げんとする潑刺たる意氣と雄圖とを抱いてゐる。併しながら、絶海の孤島に生ひ立ちたるが爲に、日本民族は、鉢植の公孫樹に類するものがある。亭々として蒼穹を摩すべき偉大なる素質を有しながら、根柢を一杯の土に托しゐる身の悲しさに、思ふさま根を伸ばし枝を張り得ざる公孫樹の姿は、是やがて日本民族の現下の姿ではあるまいか。

日本民族をこの狭い天地より救ひ出して、世界的沃野に移し植

ゑんとするもの、即ち予が海外發展論の本旨である。言換へれば、第一次には我が國を世界の日本となし、第二次には世界を日本の世界となすべき使命を遂げること、是ぞ我々日本民族の理想であり、大精神であらねばならぬ。

我が皇室が、日本民族の總本家として、悠久無比なるは、猶公孫樹が前世界より稀に残存する名木にして、たゞ我が日本に於てのみ生長發育するが如く、眞に歴史上の奇蹟的美觀である。我々は是非ともこの世界の名木を以て自任し、我々日本民族を廣き地球上に繁茂せしむることを使命としてゐることを覺悟しなければならぬ。併しながら、世界は沃野で、天然及び人爲の肥料に富むと共に、また種々の瘴癘あり、災害あることを忘れてはならぬ。是等の災害に打勝つて、自己の生命を培ひ育てるには、非常の努力を必要とする。即ち我々は、世界の文明を吸収して、日本特有の文化に

資せんとするに當つて、營養物の良否を選び分ける識見、絶えず外より襲ひ來る災害に抵抗する弾力を持たなければ、自ら文明病に罹ることを免れない。されば日本民族をして、この職能と抵抗力とを得しめることが第一の急務である。

今や我々日本民族の脚下には、一碧萬頃の物質文明の沃野が開けてゐる。そして之を包むに、近代的の空氣と、科學の彩雲を以てしてゐる。所謂近代文明の、我々を衝動する刺戟は、華美であり、壯麗である。併しながら、その華美壯麗は、極めて刹那的には強く我々の眼を刺戟するけれども、久しきにわたれば寧ろ内容の空虚に一種の寂しさ物足りなさを覚えしめるものである。こ



校學小人本日るけ於にルジラフ

れ近代文明は不自然にして不具なるが爲であり、内部の要求と外部の生活とが調和を缺いてゐるが爲である。

是等一切の不自然にして不健全なる要素が相合して、毒酒の如き世紀末の頽廢思潮を醸成した。けれども人間の生命力は、岩を裂く急湍よりも猶熾烈に、猶彈力に富んでゐる。生命の伸びんとする要求は、何物の障害をも突破して、その芽をふき根を張らずにはゐない。自然の伸張を妨げる一切の虚偽、一切の假面を擺脫せんとする努力、その結果は絶えず争闘を續け、優勝劣敗の活劇となるのは、生物界の原則である。

かの世界大戦は、これを内部的に解すれば、人間生命の活火が、虚偽の文明、虚偽の平和、虚偽の結合、虚偽の妥協を破壊せんとして爆發したものである。即ち生命を失へる舊き文明を破壊して最も自然なる、最も健全なる、新しき文明を創造せんとする産みの苦し

み、それが即ち世界大戦である。故に世界大戦は、既に生命を失ふべき十九世紀の老朽文明に最後の止めを刺し、將に現れんとする二十世紀の新鮮なる文明の大誕生を助けんとしたものである。従つて世界大戦の終結と共に、世界の思想に一大廻轉を來したことは、甚だ自然のことである。

古來、戦争は事物の母なり。」といふ諺がある。トライチュケが、永久的平和を夢みて遊惰に傾く國民は、疲弊困憊せる廢者なり。」と言つたのは、文明病に罹れる國家の運命を痛快に豫告したものである。戦争は、これが外科的療治として卓效ある大手術、大淘汰に外ならぬ。次いで來るべきものは、新生命の發見である。廢頽的舊思想の革新である。この時に際して、我が大和民族は果して如何なる覺悟を持たなければならぬか。世界に無比な民族は

トライチュケ
ドイツの史家・
政論家。(一八三
四—一八九六)

ないのである。皇室と國民との關係が、義は君臣にして情は即ち父子の如き状態にあること、驚くべき生々發展力を有する同化的進取的國民であるといふこと、是等の事實のみにも、世界何處の民族にもその匹敵あるを知らない。我々はこの世界に冠絶せる民族精神を益、大ならしめ、益、有意義たらしめ、日本民族の理想の實現に努力しなければならぬ。偏に頽廢せる歐米文物の吸収にのみ沈湎して、自己を忘れたる無自覺なる摸倣をなし、彼に同化せられる方向に歩むのみであつてはならない。我は飽くまでも主にして、彼は飽くまでも従でなければならぬが、偏狹なる排外主義的愛國論と、所謂民族的自覺とは別のものである。我々は再び日本民族を學び、日本民族の偉大性を色讀しなければならぬ。そこに我等の無窮の生命があり、生々不死の發展がある。日本は貧乏である。富の程度に於て、物質的生産力に於て、遙か

に西洋に及ばないことは確かに現在の事實である。けれども、若し日本人にして生々發展の元氣を有し、民族的團結力を有し、堅實な道義心を有し、鞏固な國家的觀念を有し、民族固有の精神、建國の本義を遵奉し、體得してゐるならば、敢へて深くそれ等の物質的方面の缺乏を悲觀する必要はない。予の憂へるところは、我が國粹の滅亡、大和魂の頽廢である。この患さへないならば、他の一切は固より、第二、第三の問題であつて、多く問ふを要しない。

嘗てウキルヘルム三世が、國歩の艱難に際して下したる勅語には、次の語が見えてゐる。曰く、「國家は、その有形的の力に失ひたる所を補充するに、精神的の力を以てせざるべからず」と。日本民族がまず、進んで世界的の大民族たらんとするには、先づ何よりも重大なる要件として、國民の一人一人が、いづれも鞏固なる國家的精神を抱き、民族的自覺の眼を覺さなければならぬ。畏多くも、

ウキルヘルム三世
プロシヤ王(一七
七〇—一八四
〇)

御宸翰

明治元年三月十
四日發布の御宸
翰の一部。

明治天皇の御宸翰の中には、

朕茲ニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ 列祖ノ御偉業ヲ繼述シ一身
ノ艱難辛苦ヲ問ス親ラ四方ヲ經營シ汝億兆ヲ安撫シ遂ニハ
萬里ノ波濤ヲ拓開シ國威ヲ四方ニ宣布シ天下ヲ富岳ノ安キ
ニ置ン事ヲ欲ス

とある。萬里の波濤を拓開し、國威を四方に宣布することは、明治天皇の世界的氣魄を示されたもので、固より建國の精神を一層明快に現代的に述べさせられたものに外ならない。

かくの如き勃々たる世界雄飛の思想、膨脹發展の思想は、嘗に御歴代の天皇の大御心の中に宿つてゐたばかりではなく、日本民族全體の血管の中に常に涌立ち、絶えず脈打つてゐたことを忘れてはならない。その民族的精神が現れて、或は桃太郎の鬼が島退治の童話となり、實際には神功皇后の三韓の役となり、倭寇となり、豊

太閤の朝鮮の役となり、或は日清戦争となり、日露戦争となり、朝鮮の合併となつたのである。我々は悉くこの志を以て、相團結し、相協力して、民族的大精神、我が國粹の發揚に全力を傾倒したならば、國家の隆々として世界に光被し發展すべきは疑念を容れないのである。

現代に於ける列國の情勢を觀るに、獨逸はその協同統治者としてのユダヤ人を排斥し、民族的實力に於て徹底的に威を振ひ、物心兩面を支配せんとする抱負を示してゐるが、これに對して、英國は今や世界的膨脹の極度に達し、爛熟正にその度を過ぎてゐるかの感がある。露國はその老なる土地と人口とを以てし、却つてその大なるに累せられ、内在的破壊力の熾烈なるとに禍せられて、十分世界政策に意を用ふるの實力を缺いてゐる。佛國は、今日すでにその進取的な發展力を消耗したやうな有様で、世界的民族競争

の第一線に立つて活躍するには、大なる國民的努力が必要であらう。

列國の情勢既にかくの如くである。我等は斷じて躊躇逡巡すべき時ではない。偷安逸樂を貪るべき時ではない。益、その膨脹力を鼓し、開國進取の旗を押立てて勇猛邁進すべき時である。我が國固有の民族精神、生々發展の氣概、道義的健闘の雄志、強大なる同化力を奮ひ起して、我が理想を發揮し、我が意氣を試むべき時である。

(後藤伯爵國民訓)

坪内逍遙

名は雄藏。文學博士。岐阜縣の人。昭和十年歿。年七十七。

長柄堤

今の大阪市東淀川區豐崎町の附近。

片桐市正且元

豐臣秀吉の臣。後秀頼の傳となる。元和元年(二二七五)歿。享年未詳。

木村長門守重成

秀頼の臣。元和元年歿。年二十一。(二二五五—二二七五)

茨木

大阪府三島郡茨木町。

一六 長柄堤の訣別

坪内逍遙

人物 片桐市正且元

木村長門守重成

時 慶長十九年の晩秋

所 長柄堤

晨雞再び鳴いて残月薄く、征馬連りに嘶いて行人出づ。はや分れゆく横雲や、残んの星を一つづつ、鐘が消しゆくいなめの、長柄堤に秋たけて、一むら蘆に風黒く、有明すごき淀川水、行きて歸らぬ浪の音、狭霧にむせびしらけゆく、千草が蔭の蟲の聲、あはれはいとまざるらん。片桐市正且元は、居城茨木へ立退かんと、從ふ郎黨一百餘人、寅の刻に邸を立つて、大阪城をあとになし、列を正してしづくと、長柄堤にさしかゝる。入りがたの月すさまじき柳蔭、枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏し、遠方におぼろくとあらはるゝ、名に大阪の四衢八街、悄然として寂

南山不落

南山が永遠に崩壊することのないやうに、堅固で、山城しなとの意、南山は支那の名山)

故殿下

豐臣秀吉。殿下の稱は、昔は攝政・關白にも用ひた。

加藤肥州

加藤清正。少時より秀吉に従つて戦功があり、後、肥後守に任ぜられた。慶長十六年歿。年五十一。(二二二一—二二七二)

大政所

オホマシドコロ。攝政・關白の母をいふ。この母は秀吉の妻。秀吉の薨去後、出家して高臺院湖月尼と稱した。寛永元年(一六二四)歿。年七十六。(一六〇九—一六八四)

脣齒已に亡ぶ

左傳に、「脣亡齒寒。」とある。

しげに、一棟高く聳えしは、

片おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと築かせられし大阪城、故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ、取分け加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬭げば、大政所の御方さへ、當家を餘處にみそなはし、浮世はなれし御有様。脣齒已に亡ぶ。今にもあれ、事起らば金城湯池もその甲斐なく、

いひかけて聲くもらせ、

片須彌より重き御遺命、夢いさゝかも忘れざれど、御運の末か情なや、この且元がすること爲すこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繋ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧遮那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか、お家とこしなへに

須彌 須彌山。大海の中にあつて高さ八萬四千由旬あるといふ佛敎で説く山。
 千姫 徳川秀忠の長女。慶長八年(二二六三)秀頼に嫁した。
 毘盧遮那佛 京都方廣寺の大佛をさす。慶長十五年(二二七〇)秀頼が再建した。
 難題 京都方廣寺大佛殿の鐘の銘に、「國家安康」の文字があり、家康これを以て己を呪詛するものとして難じた。

康かれと、祝ひし文字がもととなり、降つて沸いたる難題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕宜となつたること、御運の末とはいひながら、

こらへず馬より跳び下り、かなたに向ひ平伏なし、

片これ、しかしながら不肖且元、愚味にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罨にかゝり、仰せつけられし御遺命に、背き奉るけふの仕合せ。不忠とも、言ふ甲斐なしとも、思し召さん。それを思へば、且元がこの腸はちぎるゝばかり。償ひがたき不臣の罪は、あの世で御詫び仕らん。お許しなされて下さりませ。



大坂城古畫

在すが如く兩手をつき、人目なければ稍しばし、不覺の涙に暮れけるが、稍あつて心付き、

片あゝ、我ながら不覺の至り。わが大罪の御詫びよりも、さしかゝるお家の安危。長門守には如何にせし。心許なきことどもぢやなあ。

すかし眺むる折こそあれ。遙かに聞ゆる蹄の音。ほどもあらせす只一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る木村長門守重成。

木市正殿に候な。

片長門殿、待ちかねしぞ。

云ふ間に、駈寄る轡づら、右手におりたち顔見合はせ、言葉はなくてそゝろにも、まづ袖ぬるゝ朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入りがたの月ゆらめきて、老いゆく秋の寂しさを、長柄堤に停むらん。

木もはや豊臣の御社稷も、いよゝゝ末となつたるか。棟梁と頼む

御母公
秀頼の生母淀君

織田入道

織田信雄常眞入道。信長の次子。秀吉に従ふ。寛永七年歿。年七十三。(二二一八―二二九〇)

大野

大野修理亮治長。

渡邊

渡邊内藏介糾。

足下まで、佞人、讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。それがし圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮の其の間に、思ひがけぬ珍變あり。續いて足下に御討手と、昨朝承り大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿日ごろに似氣なく、激論の末、席を蹴立て、只今退座ありしとばかり。後は亂脈無法の評定。御母公の威を笠に被る大野、渡邊等が我意暴慢。この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の柄に手は掛けしが、貴殿が日ごろの教訓を思ひ出して、無念を忍び、^{なま}冤と知つて忠臣を救ひ得ざりしいふ甲斐なき。

悔むを且元押有め。

片いしくも堪忍せられしぞや。かねても屢、申しし如く、お家の大仇は彼等にあらざ、鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にあら

眞田安房守

名は昌幸。關が原の役に西軍方として功があり、役後、九度山に潜居してゐた。慶長十三年歿。年六十五。(二〇四―二二六八)

幸村

昌幸の次子。父と共に九度山に隠れ、後、大阪の役に秀頼の召に應じて大阪に赴き、奇計を以て屢、東軍を破つた。夏の陣に奮戦し、遂に戦死した。年四十六。

じ。某とても此の一條、遺恨骨髓に徹すと雖も、今更繰返すは愚癡の至り。大切なるはお家の後事。それがし退去のこと關東に聞えなば、破綻生ぜん事治定なるに、きのふまでは去就を定めざりし織田殿、已に心を變じ、京表へ退身せられしかば、城内の秘密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。大亂破裂せんは目前なり。この上は只ひとへに籠城の計畫こそ肝要なれ。

木して、籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。

片されば、今御城に兵糧、金銀は乏しからず。まつた猛將勇卒にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。それがしこれを慮り、萬一の備をなし置きたり。

木して、その智謀の將とは。

片今、九度山に隠れ忍ぶ、信州上田、前の城主、眞田安房守が二男左衛門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師。關が原の

長曾我部盛親

元親の第四子。土佐の領主。關原の役に西軍方に付き、敗れて封を失ひ、京都に隠れた。元和元年(一二七五)歿。

黒田家

筑前福岡の城主。こゝは黒田長政をさす。

後藤又兵衛

長政に仕へ、屢戦功があつたが、後辭して浪人となる。秀頼に招かれ大阪に入り、夏の陣に戦死した。

紀の川

奈良縣南部の山中に發し、西流して海に注ぐ。

一戰以來、關東の跋扈を怒り、螫して世の様を窺ひ居るを、先年お身方となし置いたり。事起らば、上使を以て急ぎ彼を招かるべし。合戰の進退は一切彼の人に任せられよ。その他關原の一亂以來、浪々なしし長曾我部盛親、まつた黒田家の浪人後藤又兵衛基次、いづれも得易からぬ良將なるが、かねてちなみはつけ置きたり。上、御使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜん。これ第一の手配なり。木として又、籠城となつたる曉、敵を防がん手配は。片その儀もかねて地利を考へ、出丸なくてはかなふまじと、前年紀州の山々より、材木あまた伐出させ、商業の爲と偽り、紀の川の川上より、浪速津に押流させ、御船入に積みおいたり。まつた港口の御庫には、年ごろ努めて購ひおきたる數萬俵の糧米あり、籠城數年に互るとも、なほ支ふるに餘りあるべし。

木それに加へて、故殿下が貯へおかれし數萬の金銀、近年御出費嵩

むと雖も、なほ若干の餘財あり。

片甲冑、兵具も乏しからず。

木城は名に負ふ南山不落。

片眞田、後藤の智勇をもつて、此の堅城に立籠り、忠臣悉く心を一

し、ひとへに君家を守護するときんば、

木たとひ關東の老奸雄、利をくらはせ、諸大名をなづけ、六十餘州の

兵を盡し、四方八面より攻寄すとも、

片なか／＼三年四年がほどには、攻め落さんこと難かるべし。

木まつた若年には候へども、いよ／＼軍はじまりなば、われまた一

方を承り、速水、御宿、和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命は

もとより鴻毛の、吹飜さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣將

士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦透りぬべし。利

老奸雄
徳川家康をさす。

速水

速水守久。

御宿

御宿正倫。

和久

和久宗是。以上三人何れも木村重成の家臣。

慾に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。此の上は仰せに
従ひ、此の事君に言上なし、直ちに軍の手配せん。御心安かれ、市
正殿。

片ほ、頼もしく。唯大切なるは上下の一致。必ず忠勤勵まれ
よ。とはいひながら、往時に照らし、成行く末を鑑みれば、

木淀の御方の御氣質、社鼠にひとしき大野渡邊、

片上、御發明にわたらせらるれど、

木讒佞これを蔽ふがゆゑ、

片地の利はあれども、人の和なく、

木故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打伏しし、六十餘州の民草も、

片天の時にや大御所のおのづからなる徳風に、いつしか靡く世の
有様、

木如何なればかくまでに、御運傾く西天の、

大御所
徳川家康をさ
す。

片有明の影のうすれつゝ、
木東天紅と八面に、かしましく鳴くくたかけは、
片新日東天に昇るといふ、
木世の成行の、
二人影なるか。

是非もなき世の有様と、入るかたの月眺め入り、しばしは愚癡にをちか
おいた寺、耳驚かす鐘の聲夜はほのゝと明けにけり。

(桐一葉)

一七 道義の氣魄

平 泉 澄

ファイヒテ
ドイツの哲學者、(一七六一—一八一四)

曾て獨逸の哲人ファイヒテは、ナポレオンの爲に祖國が滅亡に瀕した時、慨然としてその同胞に告げて、獨逸滅亡の眞の原因は、獨逸人自身の利己心に外ならない、一切の墮落の根源なる利己心が極度に發達して、全獨逸人の生活の唯一の衝動となるに及んで、獨逸は自滅の境に墜ちたのであると論じた。これは實に驚くべき卓見である。凡そ時の古今を問はず、洋の東西を論ぜず、社會紛亂の原因は、一に利己心の増長による。我が國に於て最も恐るべき紛亂としては、前後百年に互る戰國時代を擧げなければならぬのであるが、その戰國時代の發端は應仁の大亂であり、應仁の大亂は解決する事なくして、そのまゝ引續いて戰國亂世となつたのである。而してその應仁の大亂の原因を、いみじくも喝破したものは

應仁の亂
後土御門天皇の御代京師に起つた戰亂。

應仁記
三卷。後土御門天皇の御代、細川・山名兩氏の争の事蹟と記したるもの。著者未詳。

夏
支那古代の國號の一。

桀王
夏の十七世の王。暴虐を以て知らる。
此ノ日イツカ亡ビ
書經に「時日曷喪。予及レ汝皆亡。」とある。

高氏
足利尊氏。

應仁記である。曰く、
加之大亂ノ起ルベキ瑞相ニヤ、公衆武家共ニ大ニ侈リ、都鄙遠境ノ人民マデ華麗ヲ好ミ、諸家ノ大營、萬民ノ弊、言語道斷ナリ。是ニ依リテ萬民憂悲苦惱シテ、夏ノ民ガ桀王ノ妄惡ヲ恨ンデ、此ノ日イツカ亡ビ。我汝ト俱ニ亡ビ。下謳ヒシガ如シ。若シ此ノ時忠臣アラバ、ナドカ之ヲ諫メ奉ラザラシヤ。然レドモ唯天下ハ破ルレバ破レヨ、世間ハ滅ビバ滅ビヨ、人ハトモアレ、我ガ身サヘ富貴ナラバ、他ヨリ一段榮耀ニ振舞ハント成行ケリ。
即ち應仁大亂の原因も、亦私利私慾を恣にする心、利己心の跳梁に外ならなかつたのである。古人が「利は誠に亂の始めなり。」といつたのは、誠に名言であるといはなければならぬ。
而して高氏自らは何を理想としたか。足利氏は先祖以來、代々

今川了俊
名は貞世。足利
義詮に従ふ。歿
年未詳。

難太平記
一卷。主として
今川一家祖先以
來の事歴を記し
たもの。今川了
俊の著。

延元三年
後醍醐天皇の御
代。(一九九八)

菊池武重

吉野朝の勤王
家。肥後(熊本
縣)の人。菊池武
時の長子。歿年
未詳。

聖護寺

肥後(熊本縣)菊
池郡龍門村に今
その寺址があ
る。

天下の政權を執る事を理想とし、以て高氏に到つた事、今川了俊の難太平記に明記するところである。「七代のうちに生れ變つて天下を取るべし。」と發願し、我が命をつめて三代のうちに天下をとらしめ給へ。」と腹を切つた先祖の、その發願に應じて現れたのが高氏であつたのである。是を純忠の家、たとへば菊池氏の精神と對照して見ると、どうであらうか。延元三年三月二十七日、菊池武重が土地を聖護寺に寄進して祈つた所は、實に左の通りであつた。伏して願はくは、佛祖加被護念し給ひて、家門久しく盛んに、子孫貞心にして、武略を守りて、長く本朝の鎮將たらん。依て忠を朝家に致して、正法を護持し奉らん爲に、寄進狀件の如し。

足利の發願と、菊池氏の起請と、是を對比するに、天地の懸隔、黑白の相反、殆ど世界を異にする人なるを見る。然り、足利は利の世界

延元

後醍醐・後村上
天皇の御代の年
號。(一九九六—
一九九九)

興國

後村上天皇の御
代の年號。(二〇
〇〇—二〇〇
五)

正平

後村上・長慶天
皇の御代の年
號。(二〇〇六—
二〇二九)

後醍醐天皇

第九十六代の天
皇。

懷良親王

カネナガシヅワ
ウ。後醍醐天皇
の皇子。

に住む者である。而して菊池氏は義の世界に住する者である。ひとり足利氏のみでなく、足利氏の與黨はすべて、これ利の世界の住人であつた。ひとり菊池氏のみでなく、楠木・新田・名和・結城等の諸家は、いづれも義の世界に住んだ人々であつた。大なるかな、義利の相隔つる。義に據る人と、利を求める者とは、たとへその踏む土は相連なるとも、其の安んずる境涯は全く異なつてゐるのである。延元・興國・正平の際、天下の紛亂を以て單なる勢力の争と觀てはならない。それは實に義と利との戦であつた。私利と道義との決戦であつたのである。疑ふ者は見よ、兩者の態度の相違は、明瞭にその外交の上に現れてゐる。後醍醐天皇の皇子、征西將軍宮懷良親王は、明國が新興の勢ひに乗じて我が國に入寇せんとし、先づ書を以て威嚇し來るや、毅然として之に對して、汝に興戰の策あらば、我に禦敵の圖あり。汝もし股肱の將

賀蘭山
ガランザン。支那の北東部に在る山脈。

蒙古の轍云々
後宇多天皇の御代、蒙古族から出た元主忽必烈が文永十一年と弘安四年とに兵を率ゐて來寇し、兩度とも失敗したことをさす。

を選び、精銳の師を起し、來つて我が境を侵すとも、水澤の地、山海の洲、自ら其の備あり、豈肯へて途に跪いて之を奉ぜんや。賀蘭山前に相逢うて聊か以て博戲せん。我何ぞ懼れんや。もし汝勝ちて、我負けなば、暫く汝の意を満さん。もし我勝し我勝ちて汝負けなば、却りて汝が邦の羞たるべし。と答へ給うた。明主是を見て怒る事甚しかつたが、終に蒙古の轍に鑑み、兵を加へなかつたとは明史の傳ふる所である。蓋し、親王の御氣魄にうたれてしまつたのであらう。當時、親王の勢力は、之を兵數や財力からいへば、僅かに九州の一角に據つて逆賊と苦戰の最中であり、之を新興の明國にくらべてもとより問題にはならないのであるが、深く國體を信じ、固く大義を守らせられる精神から、この凜然犯すべからざる威嚴が發現したのである。義に據る魂の威力である。之に反して、足利氏はどうか。足利高氏の子孫

義政

足利六代將軍。
延徳二年歿。年五十六(二〇九五—二一五〇)。
文明十五年。
後土御門天皇の御代。(二一四三—)
成化十九年。
明の憲宗の年號。

義政は、將軍として天下の政權を執る身でありながら、文明十五年、明國に書を送るに、彼に媚びて成化十九年の年號を用ひ、彼に諛ひて臣と稱し、頻りに叩頭して乞うて曰く、

抑、弊邑久しく焚蕩の餘に承け、銅錢地を掃つて盡き、官庫空虚なり、何を以てか民を利せん。今、使者を遣して入朝せしむ、求むる所、こゝに在るのみ。聖恩廣大なり、願はくは壹拾萬貫を得て、以て其の求むる所を満さば、則ち賜、是より大なるはなし。

これ、路邊に叩頭し、手を擦りて、一文半錢のあはれみを乞ふ者と何の異なる所がある。利に生きる者の悲哀である。而してこれ實に、彼の足利高氏が、遠くその祖先から承けて、長くその子孫に傳へた功利私慾の醜態に外ならないのである。世のあやまつて高氏を讚美する者、眼を開いて此の事實を諦視せよ。
(建武中興の本義)

土井晩翠

名は林吉。英文學者。詩人。第二高等學校名譽教授。仙臺市の人。明治四年生。

一八 萬里長城の歌（抄）

土井 晩翠

異生ける歴史か積り來し、齡は高し二千年、
 此影は萬里の空に入る、名も長城の壁の上、
 落日低く雲淡く、關山みすく暮の色、
 征馬恨みて留りて、游子俯仰の影長く、
 絶域花は稀ながら、平蕪の綠今深し、
 春乾坤に回りては、空ことごとく霞み行く、
 天地の色は老いずして、人間の世は移ろふを、
 聞歌ふか高く大空に、姿は見えぬ夕雲雀、

三皇五帝

支那で最古の皇帝と稱せられる。伏羲・神農・黃帝を三皇、少昊・顓頊・帝嚳・唐堯・虞舜を五帝とする。

六王

戦國時代の燕・趙・韓・魏・齊・楚六國の王。

阿房宮

始皇帝の築いた宮殿。

驪山・上郡

何れも始皇帝の離宮のあつたところ。

嗚呼跡古りぬ、人去りぬ、歳は流れぬ、千載の
 昔に返り何の地か、今秦皇の霸圖を見む。
 殘壘破壁聲も無く、恨も暗き夕ぐれの
 春朦朧のたゞなかに、俯仰の游子影一つ。

二

三皇五帝あと遠く、六王終りて四海一。
 四海の黔首ひれふして、雷霆の威に聲もなし。
 「わが宮殿を高うせよ。」一たび呼べば阿房宮。
 「わが邊境を固うせよ。」二たび呼べば萬里城。
 春は驪山の花深く、秋は上郡の雲暗く。

管絃の音雲に入る、舞殿の春の夕まぐれ、
 袂を舉げて軽く起つ、三千の宮女花のごと、
 花を散らして玉觥に、浮かす歌扇の風もよし、
 彫龍の欄奥深く、薫る蘭麝の香を高め、
 珠簾を洩るる銀燭の、光残りて夜や明けむ。

臨洮
甘肅省蘭山道岷縣。

西臨洮の嶺高し、こゝ遼東の谿深し。
 流を埋め山を截り、壘を連ぬる幾千里、
 かゞりの焰天を焼き、劍の光霜凍り
 殺氣夏猶ものすぐく、守るは猛士二十萬、
 漠のこなたに胡笳絶えて、匈奴の跡は遠ざかる。

中華の三

「北夷の憂ひ絶え果てて、境は堅し國安し、
 先王の書も焚け果てぬ、天下の儒者も埋まりぬ、
 わが萬世の業成りぬ。」君王の思しかなりや。

知るや夜半の阿房宮、後庭深く森暗く
 歌臺の響よそにして、獨りあらしのつぶやくを。
 「浮世の花の一盛り、褪むるに早き色見ずや。」

聞け長城の秋の營、旌旗の暗に消ゆるとき
 またゝく光露帯びて、星の竊かにさゝやくを。
 「富も力も一場の夢、覺め果てん後思へ。」

富も力も云々
邯鄲の故事によ

霞も咽ぶ夕ぐれの、游子俯仰の物思ひ、
 北夷禦ぎし長城の、昔の跡は變らねど
 時世空しく流れては、中華の姿明日いかに、
 秦漢魏晉移り行く、昔の跡を引替へて
 西のあらしの吹寄する、黄海の波今あらし。

四

西曆一千九百年、東亞のあらし明日いかに、
 中華の光先王の、道この民を救ひ得じ。

愛を四海に傳ふべき、神人の教今空語、人の無頼無頼
 看ずや虎狼の牙鳴す、基督教徒血に渴き、昔の跡を引替へて
 羊守る力無き、異教の民の聲吞むを、昔の跡を引替へて
 俯仰古今の物思ひ、游子の恨いつ盡きむ。
 征馬恨みて嘶ける、響を返す壁のもと、
 思も遠く眺むれば、霞たゞよふ大空の
 自然の樂も絶え果てつ。關山暮れて星出でて、
 恨を含む長城の、姿は暗に吞まれ行く。

(曉鐘)

栗原嘉名芽

東京高等商船學
校教授。東京府
の人。明治三十
二年生。

一九 音の世界

栗原嘉名芽

我々は音の世界に生れ、音の世界に生存してゐる。雨・風・谷川のせゝらぎ——我々は音によつて自然の聲を聞き、自然の動きを感じる。自然界に生れ出たものとしての人間の生活が、全く音から離れては考へられないのは、實に太陽の光や熱、空氣重力などから切離された人間生活が考へられぬと同じである。是等は、我々人間にとつて、其の關係が餘りに密接、餘りに普通なために、却つて忘却されがちである。太陽の出沒や物體の落下は、常人にとつては、平凡明瞭な事實である。しかし物理學者にとつて、それは研究の對象であり、その本質は偉大なる謎である。音に就いても同じである。それは餘りに間斷なく我々の耳に入り、意識・無意識に我々を支配してゐる爲に、其の本質は却つて常人の意識を離れ、研究對

象としての音に對する興味は、全く失はれてゐるかのやうに見える。我々の耳が餘りにも巧妙に出來てゐることもその原因であつて、何等かの故障の起らぬ限り、耳そのものの存在をも忘れがちである。これを逆に考へるならば、斯くも巧妙な聽音器官の存在そのものが、我々の生存と音との關係の密接さを教へてゐるのであるといへるかも知れぬ。かくも平凡な音を理智の力にかけて分析し、整頓し、構成するところに、科學としての音響學が生れ、齊美なる音樂が發達する。

近年、無線放送と發聲映畫との出現は、人々の注意を急激に音響の世界に牽きつけた。此の二つは、近代科學の齎した驚異的結果として、一般人の興味を唆つたのみならず、藝術理論家にも深き印象を與へ、常套的理論に對する根柢的な反省を促し、映畫藝術論・ラヂオ藝術論等、新しい問題は、次々に提出された。自然人としての

我々人間の有した音の世界は、今や甚しく擴張され、科學と生活と藝術とにわたつて、新しく且重要な地位を占めるものとなつた。音の研究と利用とは、かく我々の生活と藝術とを豊富にしたが、多くの他の場合のやうに、好ましからぬ副産物を伴はぬ譯にはゆかなかつた。交通機と通信機との發達による、時間と空間との短縮、都市生活の發展、生活テムポの著しい速さは、恐るべき騒音の發生を伴なつた。騒音は、都市の居住者、通行人、工場労働者の神經に、過度の刺戟を與へて、彼等から往時の靜寂と安住と自然的な潑刺さとを奪ひ、病的興奮と能率低下と事故發生とを促進し、茲に音の嫌惡すべき方面が、遺憾なく暴露されてゐるやうに見える。騒音の防止は、一つは保健の立場から、一つは能率の立場から、醫家と技術家と理學者との反省と研究とを要求し、騒音防止問題は將に都市工學の一分科たらんとしてゐる。

(音の科學と藝術)

刺—刺

二〇 人間ゲーテ

茅野蕭々

茅野蕭々
名は儀太郎。文學博士。獨文學者。慶應義塾大學教授。長野縣の人。明治十六年生。

ゲーテ
獨逸の詩人。
(一七四九—一八三二)

プロメトイイス
ギリシャ神話中の英雄プロメトイイスに取材したゲーテの劇詩。
ファウスト
歐洲の傳説的人物ファウストに取材したゲーテの劇詩。

ゲーテの偉大は、今更言説を要しない。彼がひとり獨逸文學史上の第一人者であるばかりではなく、また世界文學上容易にその比を見出し得ない天才であることは、既に人々の知つてゐるところである。彼の精神の宇宙的抱擁力は、彼をして人生・自然の一切の感情・思想、あらゆる氣分・情調に徹しさせ、プロメトイイス・ファウストのやうな巨人的な奮闘から、下つては種々の戲言・諧謔詩に至るまで、到る處その眞を穿たないものはなく、その詩材の廣汎に互ると共に、その用語の自由・清新の趣致に富み、韻律の變化・生動の氣に溢れてゐる妙は、殆ど言語に絶すると言つてもよい。諸外國諸藝術の長所を咀嚼して、新に試みた種々の形式と獨自な様式とは、清楚・優艶・華麗・深玄・輕妙等、必要に應じて多端を極めてゐる。ゲーテ

の文學のあらゆる領域に於て、またあらゆる問題に於て、我々近代人に與へたものは、實に枚舉に暇がないといふべきである。就中ゲーテが撓まぬ一生の熱意と努力とを以て、自己及び文學の爲に、人性と事象との自然を獲得した功績は、實に他にその比を見ないといつても過褒ではないであらう。更に彼が一面、自然科学者として、事實の精確な研究認識を事としながら、研究によつて世界を無味乾燥なものとしないうで、却つて事實が詩的であることを鮮明にしたことは、彼が我々に與へる最も重大な意義であると思はれる。

しかしながら、ゲーテに於て最も偉大なものは、何といつてもそれ



ゲーテ

ヴィーラント
ドイツの詩人、
小説家。(一七三
三—一八一三)

の人間である。ヴィーラントが既に正しく道破してゐるやうに、彼こそは、實に「人間的な人間のなかの最も偉大な人間」である。彼はあらゆる人間的要素を同一な偉大さで一身に集めてゐた。この點に於て、彼は全く人間の典型と呼ばれるに値する。實際彼より鋭い悟性、彼より強い精力、彼より深い感性、彼より活潑な想像力を持つ人間はあつたかもしれない。しかし、これ等精靈の力を彼のやうに合一して偉大だつた人間は、確かに未だ一人もなかつたと斷言してもよいであらう。彼の文學の偉大も、實にこの偉大な人間ゲーテの反映に外ならない。世界文學の至寶といはれる劇詩ファウストも、この生きた人間ゲーテの生活の結晶であるが故に、一層その意義を高めてゐることは確かである。

惟ふにゲーテの一生を貫く生活原理の一つは、自己を生き盡すことではなくてはならない。天賦の才能は言ふまでもない。境遇

一例を私は擧げたいと思ふ。歴史を見ても、現状を見ても、私はかく斷言せざるを得ないことを悲しむものである。我が文化は、曾て印度に學び、支那に倣ひ、或は歐米を摸したもので、何としても民族固有の自由創造の所産ではなかつた。勿論、そこには國體の精華があり、敬神崇祖の大道がある。而して又、祝詞があり、和歌があり、俳句がある。上代に於ける氏族制度、鎌倉時代の武家政治、江戸時代の封建制度等には、全く固有なものもあり、又摸倣であるといひ難いものがあるが、大體に於て我が國の文明は、摸倣の要素を多く含んであるといへる。

明治維新の大業は、神武創業の精神に則つたものと言はれる。その氣魄の雄渾にして、志操の壯烈なるものはあつたが、新たな光彩を持つた歐洲文化に接し、加ふるに條約改正の大業を控へてゐたので、先づ泰西諸國の摸倣を急務として、自由創造の風を振起すべ

き機會と環境とを與へられなかつたのである。さうして明治時代には、幾多の驚くべき業績があるにも拘らず、摸倣追隨の國民性の缺陷も、益、その大を加ふるに至つたのである。かゝる情勢に對し、なるべく速かに一轉機を劃さなければならぬといふことは、識者の夙に叫んだところではあるが、事實は容易に行はるゝに至らなかつた。かの條約改正が、國民の多大な犠牲によつて成し遂げられた時こそは、確かに是をなすべき最初の好機であつた。併し既に日露戦争の危機が孕まれてゐた時であつたので、實現する事は無理であつた。日露戦争の終結後は第二の好機であつたが、此の時も遂に空しく機會を逸してしまつた。

歐洲戦後數年を経て、歐洲文明の行詰りが、批評家の論議に上り始め、以て今日に至つたのである。この時こそ、遅れたりと雖も、自由創造の大精神を鼓舞作興すべき機運の、彌、動き出した時である

と言はねばならぬ。苟くも國民たる者、大いに力をこゝに致すべきであらう。

されば、自由創造の大精神を喚起するには、如何なる方法を取ればよいか。これは眞に重大な問題である。かくの如き國民性に關する大問題は、一二の特別の方法によつて奇效を奏し得べきものではない。政治と言はず、教育と言はず、經濟と言はず、あらゆる方面に於て、不必要な統一束縛を撤廢し、國民をして雷同附和の陋習を脱せしめ、各、その個性に基づき、自由にその天分を全うせしめ、自己の尊嚴に目覺めさせなければならぬ。而して自由な研究、獨創の美風を作興するがために、一切の方法を講じなければならぬ。そして、それと同時に個人主義の放縱に墮して、國家社會を念としないやうになることのないやうに、細心の注意を要する。即ち、初めにいつた國民的感激性の長所を大いに發揮し、更に我等の

尊ぶべき個人は、社會生活、國家生活の基礎の上に立つてゐる個人であり、重んずべき個性は、普遍性の基礎の上に立つてゐる個性であることを明かに知り、我等の人生は、單なる個體を以て最後の存在とする個在分立の人生ではなく、始めのない始めから、終りのない終りまで、永遠に生命をたもち、而も一切を包括する全一の大人生であることを會得し、我等の個體乃至個性は、實にこの全一の人生の表現で、その全一の基礎を忘れずに、之を充實發展せしめることこそ、全一の進展を見る所以であるといふ理解を十分にしてい進まねばならない。かくして始めて國家社會を熱愛しながら、自由創造の大精神を發見することが出来るであらう。

(道の國日本の完成)

上田秋成

國學者、歌人、
文化六年歿。年
七十六。(二三九
四―二四六九)

二二 菊花の約

上田秋成

青々たる春の柳、み園に植うることを勿れ。交りは輕薄の人と結ぶこと勿れ。楊柳茂り易くとも、秋の初風の吹くに耐へめや。輕薄の人は交り易くして去ることまた速かなり。楊柳幾たび春に染むれども、輕薄の人は絶えて訪ふ日なし。播磨の國加古の驛に、丈部左門といふ博士あり。實清貧を憇ひて、友とする書の外は、總て調度のわづらはしきを厭ふ。老母あり、孟氏の操に譲らず。常に紡績を事として、左門が志を助く。其の季女なるものは、同じ里の佐用氏に養はる。此の佐用が家は頗る富み榮えてありけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘を娶りて親族となり、屢事によせて物を贈ると雖も、口腹の爲に人を累はさむやとて、敢へて受くることなし。

清貧を憇ふ
セイヒンシアマ
ナム。
孟氏の操

一日、左門、同じ里の何某が許を訪ひて、いにしへ今の物語して興じける時、壁を隔てて人の苦しむ聲、いともあはれに聞えければ、主に尋ぬるに、主答ふ、これより西の國の人と見ゆるが、伴に後れし由にて、一宿を求めらるゝに、士家の風ありて卑しからぬと見しまゝ、返め參らせしに、其の夜邪熱劇しく、起臥も思ふに任せられぬがいとほしさに、三日四日を過しぬれど、いづちの人とも定かならぬに、主も思ひかけぬ過し出で、心地惑ひ侍りぬ」といふ。左門聞きて、悲しき物がたりにこそ。主の心安からぬもさる事にしあれど、病苦の人は、しるべなき旅の空に此の病を憂へ給ふは、わきて胸苦しくおはすべし。そのやうをも看ばや」といふを、主とゞめて、瘟病は人を過つものと聞ゆるものから、家童らも敢へてかしこに行かしめず。立寄りて身を害し給ふこと勿れ」といふ。左門笑うていふ、死生命あり、何の病か人に傳はるべき。これ等は愚俗の言にて、吾が

死生命あり。
論語、顔淵篇に、
「死生有命、富貴在天」とあるによる。

な。聞え給ひそ。

輩はとらず。』とて、戸を推して入りつゝ、其の人を見るに、主が語りしに違はで、なみの人にはあらぬが、病深しと見えて、面は黄に、肌黒く瘦せ、古き衾の上に悶え臥す。人懐かしげに左門を見て、『湯ひとつ恵み給へ。』といふ。左門近く寄りて、『子、憂へ給ふこと勿れ。必ず救ひまゐらすべし。』とて、主と計りて、薬を選び、自ら方を案じ、自ら煮て與へ、粥をすゝめて病を看ること、はらからの如く、まことに捨て難きありさまなり。

かの武士、左門があはれみの厚きに涙を流して、かくまで漂客を恵み給ふ。死すとも御志に報い奉らむ。』といふ。左門慰めて、『力なきことはな聞え給ひそ。およそ疫には日數あり。其のほどを過ぎぬれば壽命をあやまたず。吾、日々に詣でて仕へまゐらすべし。』と、まめやかに約りつゝ、心を用ひて助けけるに、病や減じて、心地すゞしく覺えければ、かの武士、主にも懇に詞をつくし、左門が陰徳

富田

島根縣能義郡廣瀬町の内。

鹽冶掃部介

雲州(島根縣)富田の城主。文明十八年(一一四六)に子經久の爲にその城を奪はれた。

尼子經久

出雲・隱岐・因幡・伯耆四州(鳥取・島根)の領主。天文十年(一一八四)歿。年八十四。(一一八一—一二〇二)

三澤

出雲の國(島根縣)仁多郡三澤城主三澤氏。

三刀屋

出雲の國(島根縣)飯石郡三刀屋城主三刀屋氏。

を尊みて、其の生業をも尋ね、おのが身の上をも語りていふ、吾は出雲の國松江の郷に人と成りし赤穴宗右衛門といふ者なるが、僅かに兵書の旨を明らめしによりて、富田の城主鹽冶掃部介、吾を師としても、の學び給ひしに、近江の佐佐木氏綱にみそかの使に選ばれて、かの館にとゞまるうち、前の城主尼子經久、山中黨を語らひて、大晦日の夜すゞろに城を乘取りしかば、掃部殿も討死ありしなり。

固より雲州は佐佐木の持國にて、鹽冶は守護代なれば、三澤三刀屋を助けて、經久を亡し給へとすゝむれども、氏綱は外勇にて内怯えたる愚將なれば果さず、却りて吾を國に逗む。故なき處に永く居らじと、己が身一つを竊みて國に還る路に、此の病に罹りて、思ひがけずも師を煩はしけるは、身に餘りたる御恩にこそ。吾半世の命をもて必ず報い奉らむ。』左門いふ、見るところを忍びざるは、人たる者の心なるべければ、厚き詞ををさむるに故なし。猶、逗まりて

諸子百家
支那上代諸家の著した書の類。漢の時までに百六十九家あるといふ。

功名富貴云々
魏徴、述懐の詩に、「人生感志氣、功名誰復論。」とあるによる。

勞はり給へ。」といふに、赤穴實ある詞をたよりにて、日を経るまゝに、物みな平生にちかくぞなりにける。此の日頃、左門はよき友求めたりとて、日夜交りて物語するに、赤穴も諸子百家のこと、おろ／＼語り出でて、問ひ辨ふる心愚ならず。兵機の理はをさ／＼しく聞えければ、一つとして相共に違ふ心もなく、かつ愛で、かつ喜びて、終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれば、兄たるべき禮儀を修めて、左門に向ひていふ、吾、父母に別れ參らせていとも久し。賢弟が老母は即ち吾が母なれば、新に拜み奉らむ事を願ふ。老母憐みて幼き心をうけ給はむや。」左門喜びに堪へず、母なる者常に我が孤獨を憂ふ。信ある言を告げなば、齡も延びなむに。」と、伴なひて家に歸る。老母喜び迎へて、「吾が子不才にて、學ぶ所時にあはず、青雲の便りを失ふ。願はくは捨てずして兄たる教を施し給へ。」赤穴拜していふ、大丈夫は義を重しとす。功

問はでもしるき

兄長

コノカミ。

重陽の佳節

陰曆九月九日の節句。

茱萸

グミ。こゝは秋茱萸のことであらう。ぐみ科の落葉灌木。

名富貴はいふに足らず。吾いま母公の慈愛を蒙り、賢弟の敬を受く。何の望かこれに過ぐべき。」と、喜び嬉しみつゝ、ぞ留まりける。きのふけふ咲きぬと見し尾上の花も散りはてて、すゞしき風による浪に、問はでもしるき夏の初めになりぬ。赤穴、母子にむかひて、「吾、近江を遁れ來りしも、雲州の様子を見む爲なれば、一度くだりてやがて歸り來り、御恩を返し奉るべし。今の別れを給へ。」といふ。左門いふ、さあらば兄長いつの時にか歸り給ふべき。」赤穴いふ、月日は逝き易し。遅くとも此の秋は過さじ。」左門いふ、秋はいつの日を定めて待つべきや。願はくは約し給へ。」赤穴いふ、重陽の佳節をもて歸り來む日とすべし。」左門いふ、兄長必ず此の日を誤り給ふな。一枝の菊花に薄き酒を備へて待ち奉らむ。」と、互にまことをつくして、赤穴は西に歸りけり。あら玉の月日はやく經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊

八雲たつ國
出雲の國。今の
島根縣の大部。

にほひやかに、九月にもなりぬ。九日はいつもよりも早く起き出で、草の屋の席を拂ひ、黄菊、白菊二枝三枝小瓶に挿し、囊をかたぶけて酒飯の設をす。老母いふ、かの八雲たつ國は山陰の果にありて、こゝへは百里を隔つと聞けば、けふとも定め難きに、其の來しを見てもものすとも遅からじ。左門いふ、赤穴は信ある武士なれば必ず約を誤らじ。其の人を見てあわたゞしからむは、思はむことの恥づかし。とて、よき酒を買ひあざらけき魚を煮て廚に備ふ。
此の日や天晴れて千里に雲のたちるもなく、草枕旅ゆく人の群群語りゆく。午時も稍傾きぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に、宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて、心酔へるが如し。老母、左門を呼びて、人の心の秋にはあらずとも、菊の色濃きは今日のみかは。歸りくる信だにあらば、空は時雨に移りゆくとも、何をか怨むべき。入りて臥しもして、又あすの

氷輪
月の異名。

日を待つべし。とあるに、否み難く、母をすかして前に臥さしめ、若しやと戸の外に出でて見れば、銀河影消えくゞに、氷輪我のみを照らして寂しきに、軒守る犬の吼ゆる聲澄みわたり、浦波の音ぞこゝもとにたちくるやうなる。月の光も山の際にくらくなれば、今はとて戸をたてて入らむとするに、たゞ看る、おぼろなる黑影の中に人ありて、風のまにくゞ來るを、怪しと見れば、赤穴宗右衛門なり。踊りあがる心地して、小弟早くより待ちて今に至りぬ。盟違へで來り給ふことのうれしさよ。いざ入らせ給へ。といへど、只頷くのみにて物をもいはず。左門前に進みて、南の窓の下に迎へ、座につかしめ、兄長來り給ふことの遅かりしに、老母も待ち侘びて、あすこそと臥處に入らせ給ふ。さませませまゐらせむ。といふに、赤穴又頭をふりてとゞめつゝ、更にものをもいはず。左門いふ、既に夜をつぎて來給ふに、心も倦み足も勞れ給ひつらむ。幸に一杯を酌みてや

下物
サカナ。
井白の力

な怪しみ給ひそ。

たならず

すませ給へ。」とて、酒をあたまめ下物を列ねてすゝむるに、赤穴、袖をもて面を掩ひ、其の臭ひを忌みさくるに似たり。左門いふ、井白の力はたもてなすに足らざれども、己が心なり。いやしみ給ふ事勿れ。」赤穴、猶答へもせで、長きいきをつぎつゝ、しばししていふ、賢弟が信あるあるじぶりをなどいなむべき理あらむ。欺くに詞なければ、實をもて告ぐるなり。必ずな怪しみ給ひそ。吾はうつせみの人にあらず。きたなき靈の假に形を見せつるなり。」
左門大に驚きて、「兄長何故に此の怪しきを語り出で給ふや。更に夢とも覺え侍らず。」赤穴いふ、賢弟と別れて國にくだりしが、國人、大かた經久が勢につきて、鹽冶のめぐみを顧みる者なし。従弟なる赤穴丹治、富田の城にあるを訪ひしに、利害を説きて吾を經久に見えしむ。假に其の詞を容れて、つらく經久が爲すところを見るに、萬夫の雄人に勝れ、能く士卒をたならずと雖も、智を用ふる

大城
オホキ。

に狐疑の心多くして、腹心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約ある事を語りて去らむとすれば、經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外に放たずして、遂に今日に至らしむ。此のちかひに違ふものならば、賢弟吾を何ものとかせむと、ひたすら思ひ沈めども遁るゝに方なし。古の人のいふ、人一日に千里を行くこと能はず。魂よく一日に千里をも行く。」と。此の理を思ひ出でて、自ら刃に伏し、今夜陰風に乗りて遙々來り、菊花の約につく。この心を憐み給へ。」といひ終りて、涙涌出づるが如し。「今は永き別れなり。たゞ母公によく仕へ給へ。」とて、座を起つと見しが、かき消す如く見えなくなりけり。
左門、あわてて止めむとすれば、陰風に眼眩みて行方をしらず。俯向に躓き倒れたる儘に、聲を放ちて大いに哭く。老母めさめ、驚き立ちて、左門があるところを見れば、座上に酒瓶、魚盛りたる皿ど

も數多列べたるが中に臥倒れたるをいそがはしく扶け起して、「如何に」と問へども、只聲を呑みて泣くく、更に言なし。老母問ひていふ、赤穴が約に違ふを怨むとならば、明日若し來らば、言なからむものを。汝かくまで幼くも愚なるか」と、強く諫むるに、左門漸く答へていふ、兄長今夜菊花の約にわざ／＼來る。酒肴をもて迎ふるに、數多たびいなみ給うていふ。しか／＼の事にて約に背くが故に、自ら刃に伏して陰魂百里を來るといひて見えずなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚かし奉れ。たゞ／＼赦し給へ」と、さめざめと哭入るを、老母いふ、牢裏に繋がるゝ人は夢にも赦さるゝを見、渴する者は夢にも漿水を飲むといへり。汝も亦さる類にやあらむ。克く心を鎮むべし」とあれども、左門頭を振りて、「まことに夢のままさなきにあらざ、兄長はこゝもとにこそありつれ」と、また聲をあげて哭倒る。老母も今は疑はず。相叫びて其の夜は哭明かしぬ。

渴する者は云々
白氏文集に「渴人多夢飲」とあるによる。

あくる日、左門母を拜していふ、吾幼より身を翰墨に寄すと雖も、國に忠義の聞えなく、家に孝信を盡すこと能はず。徒に天地の間に生るゝのみ。兄長赤穴は一生を信義の爲に終る。小弟今日より出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせむ。尊體を保ち給うて、暫くの暇を賜ふべし。老母いふ、吾が兒かしこに去るとも、早く歸りて老が心を休めよ。永く返りて、けふを久しき日となすこと勿れ。左門いふ、生は浮きたる漚の如く、あさにゆふべに定めがたくとも、やがて歸りまゐるべし」とて、涙をふるうて家を出で、佐用氏にゆきて老母のいたはりを懇に頼み、出雲の國にまかる。路に飢ゑて食を思はず、寒きに衣を忘れて、まどろめば夢にも哭明かしつゝ、十日を経て富田の大城に至りぬ。

先づ赤穴丹治が家にいきて姓名をもていひ入るゝに、丹治迎へ請じて、翼あるものの告ぐるにあらでは、いかで知らせ給ふべきい

翼あるもの云々
漢の蘇武の故事による。

公叔座云々
史記商君傳に出
てゐる。

商鞅
支那、衛の人。
秦の孝公を助け
て法令を變改し
た。商に封ぜら
れて商君と號し
た。孝公の歿後
殺された。

はれなし。』と頻りに問ひもとむ。左門いふ、士たる者は、富貴の事と
もに論ずべからず、たゞ信義をもて重しとす。兄長宗右衛門一旦
の約を重んじ、空しき魂の百里を來るにむくいすとて、日夜を逐う
てこゝに下りしなり。われ學ぶところについて子に尋ねまゐら
すべき旨あり。願はくは明かに答へ給へかし。昔、魏の公叔座病
の牀に伏したるに、魏王自ら詣でて手をとりつゝ告げて、『若し諱む
べからざるのことあらば、誰をして社稷を守らしめむや。吾が爲
に教を残せ。』とあるに、叔座いふ、『商鞅年若しと雖も奇才あり。王若
し此の人を用ひ給はずば、これを殺すとも境を出すこと勿れ。他
の國に行かしまへば、必ず後の禍となるべし。』と、懇に教へて、又商鞅を
ひそかに招き、『吾、汝をすゝむれども王許さざる色あれば、用ひずば
却りて汝を害し給へと教ふ。これ君を先にし臣を後にするなり。
汝、速かにひとの國に去りて害を免るべし。』といへり。この事、子と

雨月物語
五卷。上田秋成
作の和文の物
語。

宗右衛門に較べては如何に。』丹治只頭を低れて言なし。左門座
をすゝみて、兄長宗右衛門、鹽冶がよしみを思ひて尼子に仕へざる
は義士なり。子は舊主の鹽冶を捨て尼子に降りしは士たる義な
し。兄長は菊花の約を重んじ、命を捨て百里を來しは信あるかぎ
りなり。子は今尼子に媚びて骨肉の人を苦しめ、此の横死をなさ
しむるは、友とする信なし。經久強ひてとゞめ給ふとも久しき交
りを思はば、ひそかに商鞅、叔座が信を盡すべきに、たゞ榮利にのみ
走りて士家の風なきは即ち尼子の家風なるべし。されば兄長何
故此の國に足をとゞむべき。吾、今信義を重んじて、態々此處に來
る。汝は又不義の爲に汚名を残せ。』といひも終らず、拔打に斬りつ
くれば、一刀にて其處に倒る。家眷ども立騒ぐひまには、やく逃れ
出でて跡なし。尼子經久此の由を傳へ聞きて、兄弟信義の篤きを
憐み、左門が跡をも強ひて逐はせざりきとなり。
(雨月物語)

奥田正造

教育家。成蹊高等女學校長。岐阜縣の人。明治十七年生。

二三 茶 味

奥田正造

禮の用は云々
論語に「有子曰、禮之用、和爲貴」とあるによる。

程子

程頤。宋代の哲學者。元豐八年(西曆一〇八五)

主一無適

シユイツムテキ。他念を雑へず心を一所に集注すること。二程全書に「程子曰、主一無適、無適之謂レ一」とあるによる。

茶道の精神を簡単に言ひ盡す言葉は「和敬清寂」の四字である。この四字が尊重せられつゝ傳はつたことは、貴いことであり、又嬉しいことである。この四字を換言すれば、能和敬能清能寂の四綱領となる。

和は、和合の和、調和の和、和樂の和である。「禮の用は和を貴しとなす。」人相我相に役せられ、知るに傲り知らざるを辱しむるやうな人は、人として人に交はる資格がない。併し、如何に和が貴いといつても、和だけでは狎れ易い嫌ひがあるので、これを攝するに敬を以てせねばならぬ。敬とは、自己に對しては慎み、他人に對しては敬ふといふ心持で、程子の所謂主一無適、即ち專念である。そし

利休

千宗易。茶人。天正十九年(一一五二)歿。

て、それが形に現れたものが儀容である。清は、いふ迄もなく清潔、清慮の清であり、物と心との清であるが、殊に茶器を扱ふ時の清は、茶味の第一義である。或田舎人が、五兩の金を利休に送つて、茶器の購入を乞うた時に、利休はたゞ茶巾と茶筌ばかりを送つた。白いきれいな茶巾ですつきりと拭はれ、新しい茶筌で茶が點てられた時、入れた器はたとひ古いかけた茶碗でも、それはもはや、かけ茶碗ではないのである。直接客には見えない水屋の働、家庭に於ては臺所勝手元の働に、若しこの清が缺けてゐたならば、どうして眞實の茶味が出て來よう。以上に加へて、心のおちつき、即ち寂が具はるやうになれば、申分がなくなるのである。固より茶道は、さのふ屈強の若者もけふは戦場の露と消え、高壯の建物も忽ちにして灰燼に歸する、戦國のはかなくそはくしい時代の氣分に對する鎮靜劑として要求せられ、發達したものであるから、自然に兵馬倥

惚の間に得らるゝ僅かの暇を利用して、時間を超越した悠久の自己に悟入すべく、その一舉手一投足にも、心のおちつきを宿すことを要求する。これが即ち寂である。この「和敬清寂」の四字を標的として、各自相應の天地を開く所に、茶道の妙味がある。

以上の四綱領は、茶道の大精神である。しかしよく考へると、それは單に茶室裏に限ることではなく、人生萬般の事、皆この四字で律せられる。修行の道場は四疊半でも、活用の舞臺は人生全體に互り、事々物々、念々刻々に通じて、日常生活の準據となるわけである。茶道の徳は實に茲に在る。珠光は、義政に答へた言



茶室

珠光
シユクワウ。村
田氏。足利時代
の茶人。

葉の中で「茶は遊に非ず、藝に非ず、又放樂に非ず、一味清淨法喜禪悦なり。」といひ、又「賓主應接の禮、彼此談論の和、而もその交、水の淡きに似て、清遊仙の如し。」といつてゐる。利休は「和ぎて流れず、敬して諂はず、清くして潔く、寂にして躁しうせざれ。」といひ、「茶は精行儉徳の人によるし。」といつてゐる。この精行儉徳といふ四字は「和敬清寂」の四字を姿に現したやうなものである。精行とは、行に精しいといふことで、一々の動作に心が籠るの意味である。一舉手一投足は勿論、一器を扱ひ一物を動かすにも、心の奥の鏡にかけて、餘裕のある姿をうつすことである。小さい室をも廣く、胖かに住みなし、細く短い茶杓を拭うても、太く長い物を清むると同じ様な心を宿し、軽い羽箒を動かしても、おもやかなる扱ひに心の莊重を現し、重い水指を運んでも、易々として從容の心を現す。是等の習によつて、この精行が修練されるので、かやう

な間に小を小とせず、乏しきを乏しとせざる道念が養はれ、事々物物に對して、その所以を知り、その來由を慮り、これに接して法悦歡喜の情、感謝報恩の念を養ふやうになるのである。一粒の飯、一本のマツチも、今我が目前一瞬の用を辨ずる事によつて、この物の一生は終るなりと觀ずれば、決してこれを輕々しく用ひる心が起らぬのみか、このさゝやかなる物に宿る廣大無邊なる自然の力、天地の恩に氣がついて、感謝の生活、知足安分の境遇に入らずには居られなくなる。これが即ち儉徳である。こゝに於ては誇るべき奢りもなければ、愧づべき不及もない。これその位に素して行ひ、その外を願はざるの境であり、知足の法は即ちこれ富樂安穩の處である。「和敬清寂」の四字に導かれつゝ、精行儉徳の人となる。これが茶道の修であり、證である。

二

和敬清寂といひ、精行儉徳といふ、この心身を練る第一歩は感受性を鋭敏ならしむるに在る。その爲には、特に或境地を作つて、そこへひき入れ、それにひたらせ、それを味ははしめねばならぬ。これが心の教育であり、茶道の修練である。所謂或境地とは、云ふまでもなく茶室のことである。細かい所までよく氣づかしめるには、大きい廣い散漫な部屋ではいけない。それは、起居振舞の爲に動く微かな風をも感ずるやうな小室でなければならぬ。珠光は、在來の大きな室を縮めて、始めて四疊半を作つた。心を練るといふ事に氣づく時、これは尤もなことであつたと思ふ。紹鷗は、この古規に則つて四疊半を作り、更に室内の趣を簡略にして、これを草の座敷と稱した。利休は、師の紹鷗と相談して、更にこれを二疊半に縮小した。これは一面に於ては、華麗な書院式の裝飾を適用する餘地のないやう、知足安分の生活を可能ならしめるやうに工夫

紹鷗
武野紹鷗。茶人。
利休の師。大阪
の人。

六根

ロクコン。人間の惑を生ずる六つの根原。即ち眼・耳・鼻・舌・身・意。

したのであらうが、心を練るといふ他面から考へても、かくせねばならなかつたのである。又茶室を普通北向とし、南の光線を避けて幾らか薄暗い室とするのも、この静の境地を作らんが爲である。かゝる工夫によつて作り上げられた室内で、心を練るに當つて、最も都合よく、又最も重き役目を爲すものは、微かなる感じである。静かなる境地に於て、眼・耳・鼻・舌・身・意、六根の微妙なる活動が營まるゝ時、心の世界の未だ嘗て開かれなかつた部分の門が開かれる。その中でも、耳の力が最も強い。主人は客の一舉一動から出る音に心の耳を澄まし、客は主人の働から出る音に心の耳を洗ふ。されば、茶には種々の響がある。來著の旨を報ずる板の音は、客が主人の心に響かず第一の響である。これを聞いた主人が、出で迎ふるにあたつて、手水鉢の水を改めんとて、さつとうつす水の音は、馳走の最初の響である。

南坊録 茶道の書物の名。茶道南坊流の流祖宗啓の記録。

露地の飛石を渡れば下駄の響がする。南坊録に「露地の出入に下駄はくこと、紹鷗以來の定めなり。草木の露深き所を往來する故、斯くの如し。樂に沓の音功者不功者を聴き知る」といひ、又「かしがましくなきやうに、又さし足するやうにもなく、おだやかに無心なるが功者と知るべし。得道の人ならでは批判し難し」といつてある。かうなると下駄の音も中々むつかしくなる。併し、これも亦照顧脚下の一で、これによつて、足元に心を置く良習も自ら養はれる。つくばひで手水を使ふ音の清々しさと、手を洗ひ終つて立上がる時に出る下駄の音とは、次客への合圖となるので、唯單に主人へ響かせるだけではない。やがて席入りの爲に戸の音がする。疊ざはりの音は、その人の品位を偲ばせ、更に客自身の心をも落著かせる。客一同が入席し終るまで、その動作から出る響が続いて主人の心に通ふので、水屋に端坐してこれを聞けば、壁を隔てて客

の一姿一態を心に見るのみならず、その響によつて客の心持までも察する事が出来る。又、主人が手前の間に工夫して出す種々の響は、皆自然を偲ばせて、微かなる音に深い意味を添へてゐる。即ち茶碗に汲入れる水の音を笥の音にかよはせ、茶筌に谷川のせせらぎを偲ばせ、賤山がつの斧の音をひびかすなど、山里の趣を集めて、静境に幽趣を添へる。

これ等の響の背景として、始終一貫するものは、釜の湯の煮える音である。通常これを松風といつてゐる。この松風は樂音と違ひ、旋律の影響を受けてゐないので、静寂の興趣を一層深からしめ、落著いて聞いてゐると、心を大森林の奥、大幽谷の底までも持つて行つてしまふやうな心地がする。太古の如き静けさの内に、その幽趣を増すものは、松韻と谿聲とである。これを四疊半裡にうつしてこの趣を偲ばしむるは、實に茶境の力である。かく心耳を澄

まし來れば、微かなる感じは、たゞ微かなる感じではなくなつて、その微かなる感じの彼方につゞく、大きな重い意義の世界が開けてくる。

突堂和尚は、曹洞宗近世の名僧であつたが、一日殷々とひびく曉鐘に心耳を澄まし、禪定から起つて侍僧を召し、鐘撞く者の誰なるかを見させた。侍僧は、それが新參の一小沙彌である旨を報じた。そこで突堂和尚は、その小沙彌を膝下に招いて、今曉の鐘は如何なる心持で撞いたか。と尋ねられた。沙彌は、別にこれといふ心もなく、たゞ鐘を撞いたばかりであります。と答へたので、いやさうではあるまい、何か心に思つてゐたであらう。鐘つかばかくこそ。誠に貴い響であつたぞ。と云はれて、別にこれといふ心得も御座りませぬが、たゞ國許に居ました時、師匠が鐘をつく時は、鐘を佛と心得て、それに添ふだけの心の慎みを忘れてはならぬと、常々戒めて下

突堂
エキダウ。突堂
旃崖。曹洞宗管
長。明治十二年
歿。

森田悟山
曹洞宗管長、大
正四年歿、年八
十二。

されました。それを思ひ浮べて、鐘を佛と敬ひ、禮拜しながら撞いたばかりでござります。」と答へた。突堂和尚は、しみじみとその心掛に感じ、「終生萬事につけて、今朝の心を忘れるなよ。」と戒められたといふ。この小沙彌こそは、後年の森田悟由大禪師であつたのである。朝毎に夕毎に慣れて撞く鐘の一韻にさへ、かほどまで敬虔の念をこめた古人の心づかひは、如何にも尊いものではないか。已に音によつて心が澄みわたつて來ると、心の窓である眼には、眞の趣がうつる。曉の露地では、幽かなる殘燈が心を照らす。殘燈に心づけよと教へるのは、露地に配合せられたその光の工合であつて、油皿の置き方や、油の残り加減ではない。秀吉が曉の會に招かれて、露地に入つた時、その侍臣を顧みて、「あの殘燈はいかに。」と云つた。侍臣は「燈火かゝげよ。」といふ思し召と誤つて、火の加減を變へた。これを見た秀吉は、「はや殘燈の趣失せにけり。」と嗟嘆した。

と云ふ。悲しいかな、侍臣の心の眼が暗かつたのである。

序破急の呼吸
茶のたて方に、
初・中・終の三
順序があつて、
それぞれ異なる心
持があるといふ
意。

點茶の間、主人の姿に變化があると心づき、また手前は序破急の呼吸があると氣がつくまでに、心眼が開けて來ると、心をこめた主人の飾り方、即ちこれに含ませられた意義を、殘る隈なく己が心の鏡にうつすことが出来るやうになり、また一物一體の自らなる位置にも心づき、受取つた物は出されたやうにして返し、拜見の爲取上げた物は、再び元の通りに置く事が、知らず識らずの間に出來るやうになつて來る。又主客相對すべき定座に、主位を奪ひ通ひ口を塞いで、慇懃の尾籠を敢へてするやうなこともなくなつて來る。以上視聽の外、更に鼻には香、舌には味と、それ／＼六根の修練が加はれば、これによつて養成せられた理智は、ひとり茶味の上に必要なばかりでなく、また人生その物を潤澤ならしめる所以のものとなるであらう。

(茶 味)

補習文

一 倫敦塔

夏目漱石

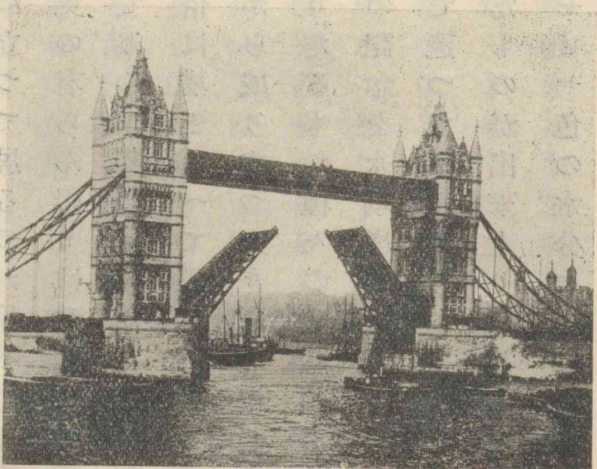
倫敦塔
ロンドン市のテ
ームス河の北岸
に臨む。ウイリ
ヤム王の時始め
て建てた白塔を
中心とし、その
後の諸王が次第
に増築した諸建
物の總稱。

テームス河
英國の首都ロン
ドン市中を貫流
する河。

倫敦塔の歴史は、英國の歴史を煎じ詰めたものである。過去と云ふ怪しき物を蔽へる戸帳がおのづと裂けて、龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。すべてを葬る時の流が逆しまに戻つて、古代の一片が現代に漂ひ來れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬車汽車の中に取残されたるは倫敦塔である。

此の倫敦塔を、塔橋の上からテームス河を隔てて眼の前に望んだ時、余は今の人か、將、古の人かと思ふ迄我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の初めとはいひながら物靜かな日である。空は灰

汁桶を搔交ぜたやうな色をして、低く塔の上に埋もれ懸つて居る。壁土を溶かし込んだやうに見えるテームスの流は、波も立てず音もせず、無理やりに動いて居るかと思はれる。帆懸舟が一艘、塔の下を行く。風なき河に帆を操るのだから、不規則な三角形の白き翼が、いつ迄も同じ所に停まつて居るやうである。傳馬の大きいのが二艘上つて來る。只一人の船頭が、艫に立つて櫓を漕ぐ。是も殆ど動かない。塔橋の欄干のあたりには、白い影がちらくする。大方鷗であらう。見渡した所、すべての物が靜かである、物憂げ

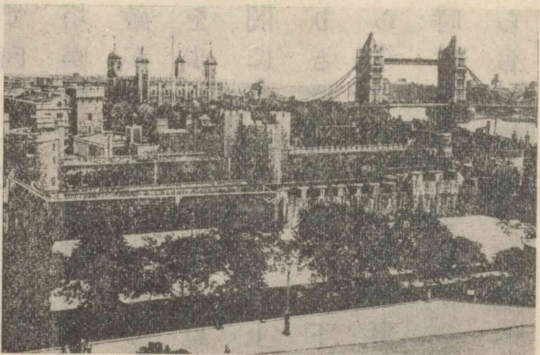


テームス河

に見える、眠つて居る。皆過去の感じである。さうして、其の中に冷然と二十世紀を輕蔑するやうに立つて居るのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟くも歴史の有らん限りは、我のみは斯くてあるべしと云はぬ許りに立つてゐる。其の偉大なるには今更のやうに驚かれた。此の建築を俗に塔と稱へて居るが、塔と云ふは單に名前のみで、實は幾多の櫓から成り立つ大きな地城である。並び聳える櫓には、丸きもの、角張りたるもの、種々の形状はあるが、何れも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を永劫に傳へんと誓へる如く見える。九段の遊就館を石で造つて二三十並び、それを蟲眼鏡で覗いたら、或は此の塔に似たものが出來上りはしまいかと考へた。余はまだ眺めて居る。セピヤ色の水分を以て飽和した空氣の中に、ぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀の倫敦が、我が心の裏から次第に消去ると同時に、眼前の塔影が幻の如き過去の

遊就館

東京市麹町區九段坂上踏國神社の境内に在る。新古の武器その他軍事に關係ある物品を陳列する。



歴史を我が腦裏に描出して來る。朝起きて啜る澁茶に立つ烟の、寐足らぬ夢の尾を曳くやうに感ぜられる。暫くすると、向岸から長い手を出して余を引張るか、と怪しまれて來た。今まで佇立して身動きもしなかつた余は、急に川を渡つて塔に行きたくなつた。長い手は猶々強く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡りかけた。長い手はぐい／＼牽く。塔橋を渡つてからは一目散に塔門まで馳著けた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は、現在に浮游する此の小鐵屑を吸引してしまつた。空濛にかけてある石橋を渡つて行くと、向うに一つの塔がある。

是は丸形の石造で石油タンクの状をなして、恰も巨人の門柱の如く左右に屹立して居る。その中間を連ねて居る建物の下を潜つて向うへ抜ける。中塔とは此の事である。少し行くと左手に鐘塔が峙つ。眞鐵の楯、黒鐵の兜が野を蔽ふ秋の陽炎の如く見えて、敵が遠くより寄せると知れば、塔上の鐘を鳴らす。星黒き夜、壁土を歩む哨兵の隙を見て逃出す囚人の、逆しまに落す松明の影より闇に消える時も、塔上の鐘を鳴らす。心傲れる市民の、時の政非なりとて蟻の如く塔下に押寄せて犇めき騒ぐ時も、亦塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。或時は無二に鳴らし、或時は無三に鳴らす。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした鐘は、今何處へ行つたものやら、余が頭をあげて蔭に古りたる澗を見上げた時は、寂然として既に百年の響を収めて居る。

(漾 虚 集)

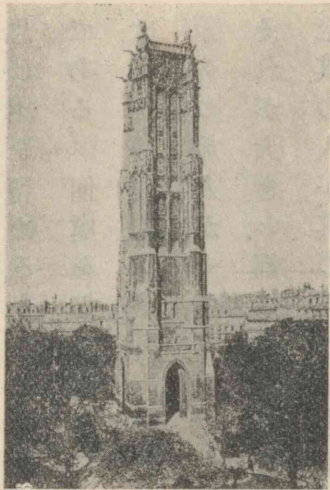
二 鐘 の 音

西 條 八 十

○東洋から來た旅人が、ヨーロッパを旅行して、耳の底に最も強い思ひ出を留めるものは、其の行くさきふらの村や町で聽く鐘の音である。何處をどう旅して行つても、鐘の音を聞かないといふ日は殆ど一日も無い。

先づ旅人がヨーロッパを旅行して、ふと知らない町に入込む。それが大きい都であらうと、小さい一寸した田舎町であらうと、若し其の人が、其の町の中心は何處であるかを知らうとしたら、それ位簡単な事はない。その旅人は、唯頭を擧げて空を仰げばよいのである。空には必ず其の町の寺院の鐘樓が高く聳えてゐる。旅人は此の鐘樓を目指して、進んで行けばよい。さうすれば、きまつて其の鐘樓の隣に、其の町なり村なりの役場があり、それに續いて、

目抜の官衙だの商店だのが、ずらりと竝んでゐる。日本のやうに、わざ／＼地圖を擴げたり、人に聞いて見なければ分らぬやうな事は決して無い。



(スナラフ) 寺本のスナラ

こんな譯で、ヨーロッパを歩く人々は、夕暮疲れて宿に歸る時にも、必ず耳元に寺の鐘の音を聞き、又その翌朝、夜の安息にすつかり元氣を恢復して其の町を立出る時にも、やはり朝の鐘の音に送られながら歩み出すのである。それが空晴れた日ならば、青葉の上の白い雲を搖がし、もん／＼とうなりを曳いて、海の白い泡のやうに頭上にいつばいにひろがつて行くあの莊嚴な鐘の響——、またそれが寂しい秋雨の日ならば、何か大きな黒い手が、落葉を交

蘇合香
ソガフカウ。金
縷梅科に屬する
落葉喬木。

ブルージュ
ベルギー西部の
フラマン地方に
ある都邑。
フラマン地方
フレミッシュ人
の住む地方。ベ
ルギーの北部。

へて、色褪せた薔薇や、蘇合香や、さうした昨日の美しい花の亡骸を、冷たい屋根々々の上にさあつと投げ／＼して行くやうな、しめやかな鐘の音——、ヨーロッパの旅と、鐘の響とは、其處にどうしても離す事の出来ない約束を持つてゐる。

私は二箇年の旅の中で、種々な處で種々な鐘の音を聞いた思ひ出を持つてゐるが、中でも一番強く頭に印象されてゐるのは、ベルギーの古い都ブルージュを訪ねて聞いたカリヨンの音である。カリヨンは「衆鐘合鳴」と譯して、澤山の鐘が響を合はせて一度に鳴り出す事である。フラマン地方のカリヨンと云へば、世界的に有名なものであるが、中にもブルージュのお寺のカリヨンなどは、鐘の数が八十もあつて、それが揃つて一度に鳴り出すのであるから、大空に海の潮の響を聴くやうな思がするし、また全身に光の驟雨を浴びるやうな思がして、其の壯大崇嚴な感じは何とも云はれな

マーテルリンク
 ベルギーの詩人。劇作家。(一八六二—)
 ヴェルハーレン
 ベルギーの詩人。劇作家。(一八五五—一九一六)
 ジョルジュ・ローダンバック
 ベルギーの詩人。(一八五五—一九九七)

い。ブルージュと云へば、あのマーテルリンク・ヴェルハーレンと並べて、ベルギーの三大詩人と呼ばれるジョルジュ・ローダンバックの故郷である。此の人が、カリヨンの音を、独特な沈鬱な調子でうたつた「田舎で」と云ふ詩がある。

田舎の町のものうげな朝の中で
 カリヨンが鳴りわたる
 妹のやうな眼で見つめてゐる曉の
 やさしさの中で鳴りわたる
 カリヨンが鳴りわたる
 その青白い音楽が ひらくと
 あたりの屋根々々のうへに
 散りこぼれる

(一八六二—)
 (一八五五—一九一六)
 (一八五五—一九九七)

黒い破風の段のうへに
 風が摘むぬれた響の
 花束のやうに散りこぼれる
 塔から落ちてくる朝の音楽よ
 それはとほくしをれた
 花環となつて散りこぼれる
 かくもゆるくかくも冷たく
 かくも蒼ざめた花片となつて
 落ちこぼれる
 歳月の死んだ額から
 散りくるもののやうに

復活祭

キリストの復活を祝ふ祭。毎年春分の後に来る満月の次の第一日曜に行ふ。

ポードレエル
フランスの詩人。(一八二一—一八六七)

彼が産聲をあげた場所ではないが、若い日の大半を過したのは、ブルージュの都である。此處は、昔十二世紀から十六世紀までは、頗る殷賑な大商業市であつたが、今では、全く衰へて、死都ブルージュの名に背かない荒果てた都になつてゐる。私は、丁度復活祭の頃、此處を訪ねたが、青黒く淀んだ運河が縦横に、古びた町を貫き、其處には灰色の頹れた家々の影が映り、その上を白鳥の群が音なく浮んで過ぎ、また傳説的な小さい池にとりまかれた赤黒い煉瓦建の尼寺が、中世紀の宗教的情熱を偲ばせるやうに立竝んでゐたりして、さながら古い銅版畫を眼前に見る思がした。

とにかく、こんな風にヨーロッパの人々の生活と鐘の音とは、いつも親しい関係をもつてゐるだけ、詩人達の作品には、鐘を題材にして作つたすぐれたものが多いやうである。近代のフランスの詩人の作品に、一寸その例を求めて見ても、ポードレエルには、あの

ヴェルレエヌ
フランスの詩人。(一八四四—一八九六)

モンス
ベルギーの南部、フランスに近ところにある小都會。

冬の夜、火の傍で遠い鐘の音に耳を傾けながら、自分の傷ついた魂を、ひびの入つた鐘にたとへた「ひび」われたる鐘」などの作があるし、ヴェルレエヌには、モンスの牢獄の鐵格子から初夏の静かな青空を眺めながら、

青空は屋根のかなたに

かくも静かに、かくも青し

樹は屋根のかなたに

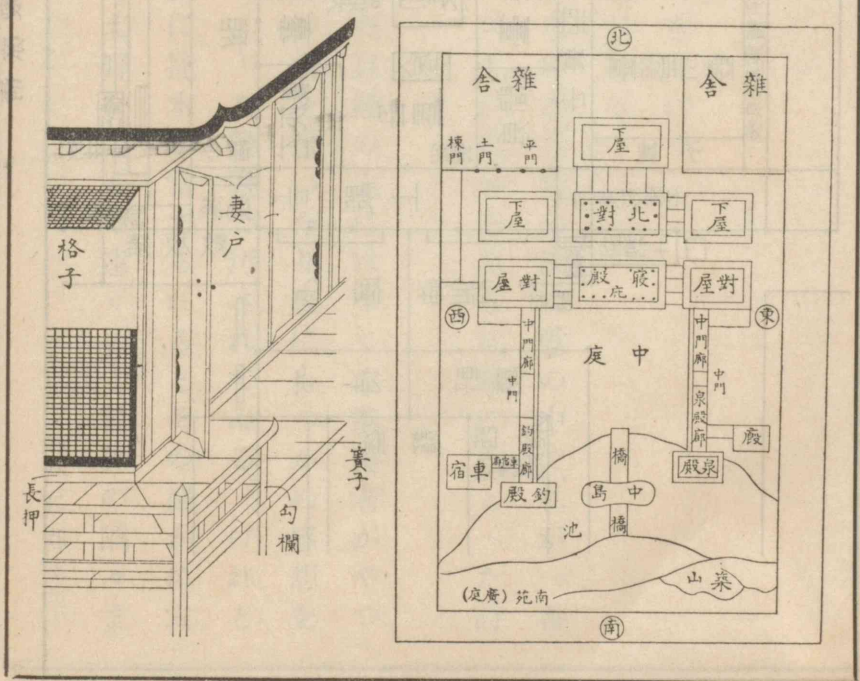
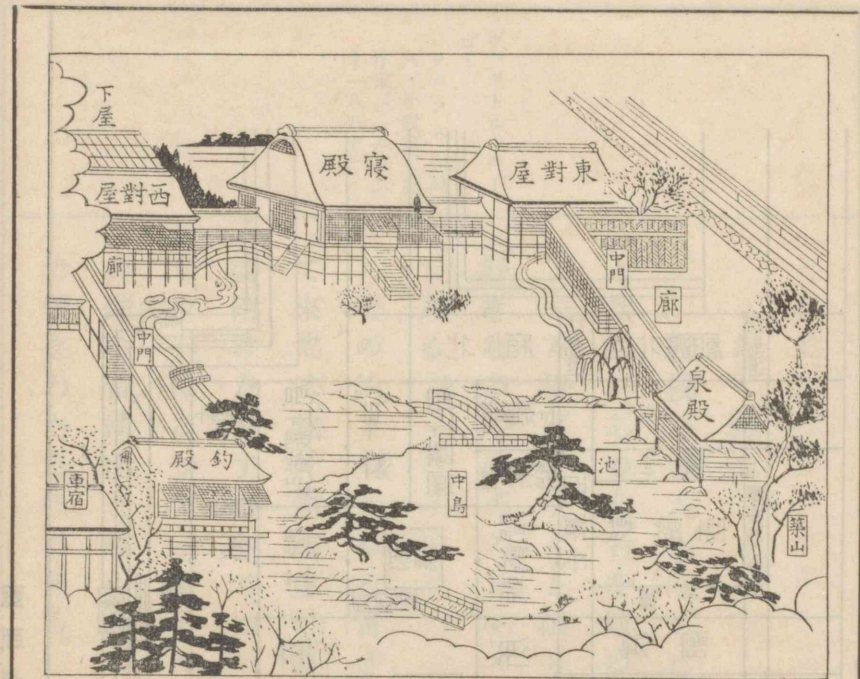
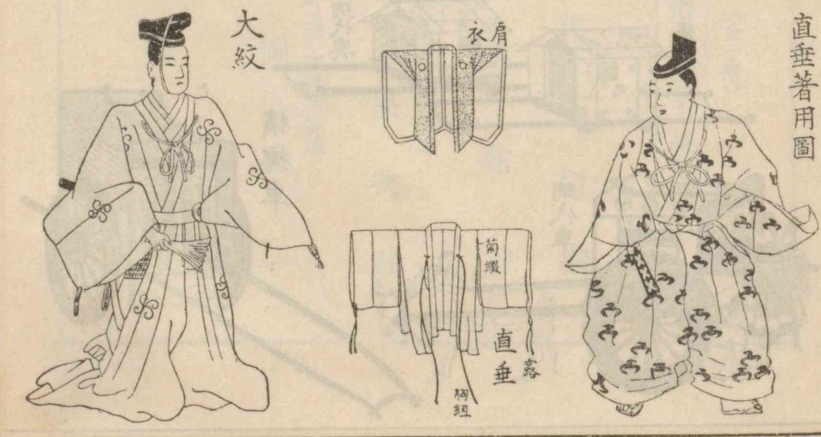
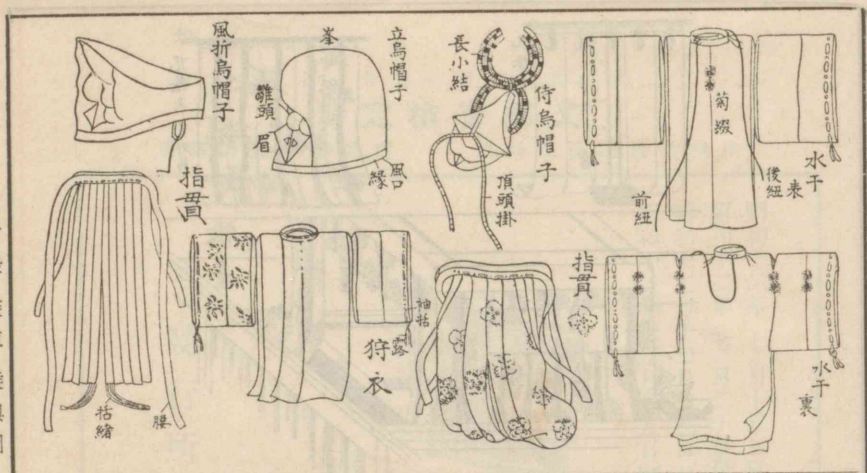
青き葉をゆする

うちあふぐ御寺の鐘は

やはらかに鳴る

うち仰ぐ樹の上に

鳥はかなしくうたふ



昭和十三年一月廿一日

文部省檢定

實用國語教科書 中學國語文教科書

昭和十二年七月十五日印刷
昭和十二年七月二十日發行
昭和十二年十二月廿三日訂正再版印刷
昭和十二年十二月廿五日訂正再版發行



發行所

東京市神田區錦町二丁目七番地
大阪市南區順慶町通二丁目五十三番地

湯川弘文社

印刷者

岩岡忠一

發行者

湯川松次郎

編者

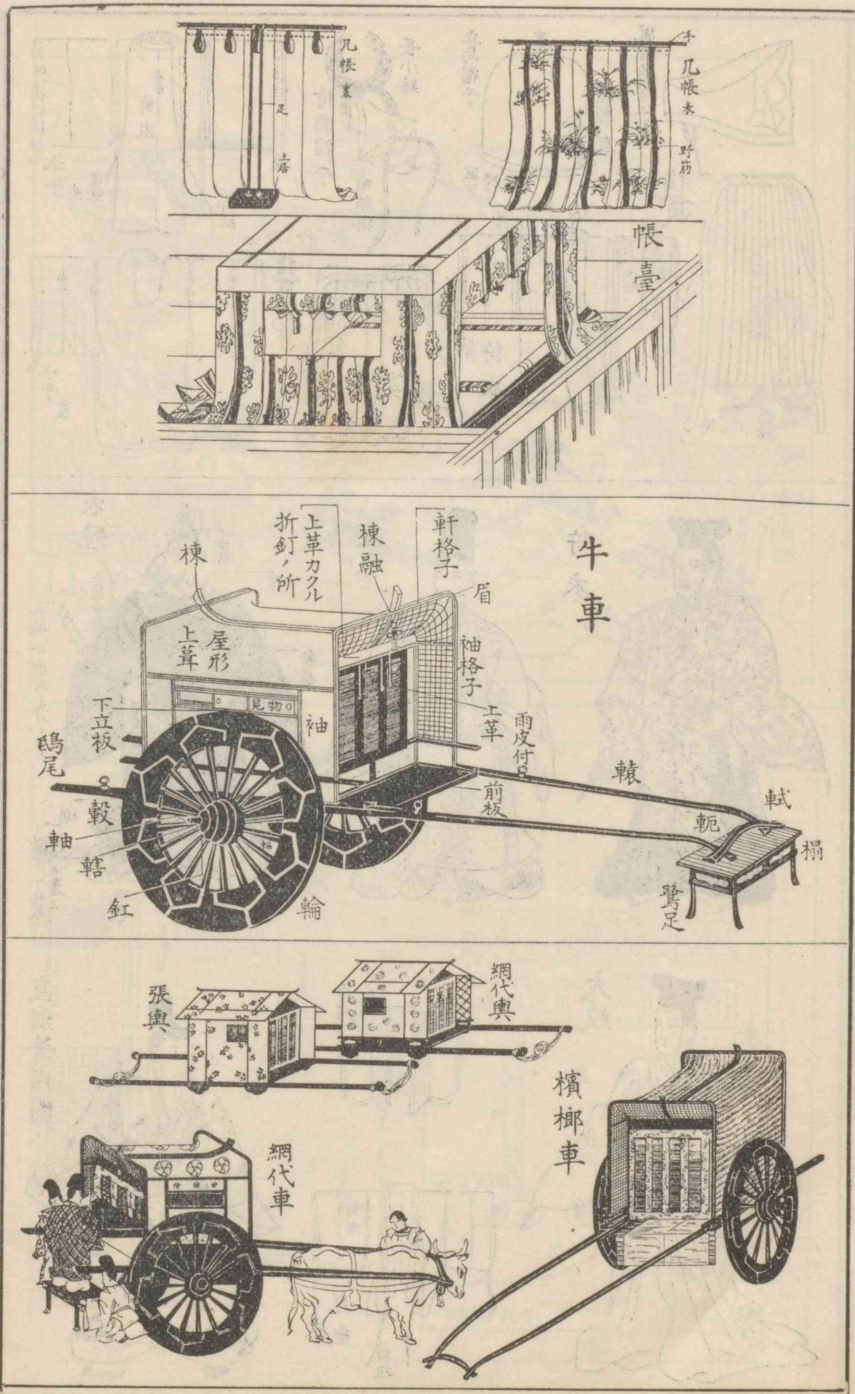
武田祐吉

編者

佐佐木信綱

新制國語讀本(全十冊)

定價各金六拾錢



文 藝 會 社 宣 佈

中華民國二十二年一月一日

第一號
第二號
第三號
第四號
第五號
第六號
第七號
第八號
第九號
第十號

四年
須磨敏



